り。然し詩人の心にはそのかいま見えてゐる雪に掩はれた山肌の光りの變化をみまもつてゐるだけで、色彩學に對する新しい想念を呼びさますには十分だつた。……

さらに見廻せば、彼の立つてゐるブロッケン山をとりまいてゐる山々、地上の富をもたらす幾多の鑛脈を潜めてゐるにちがひないそれらの山々、――詩人の飽くことを知らない自然探究の心は、かくして地質の構造、鑛物學などの上にまで擴げられて行くのである。いまこそ、彼の大いなる使命の自覺が彼の裡に目ざめつつあるのである。――

そこでゲエテの詩は終る。――「ギョオテ傳」に據ると、詩人はブロッケン登攀後、さらに二日間ハルツを歩き廻つてから、狩獵の一行と落ち合つて、一しよにワイマルに歸つた。そしてこの旅から歸つた頃から、ゲエテは著しく眞面目になり、一種の超然たる内生活に入つたといはれる。

私は病牀にあつて、この僅か十一節よりなる詩を讀了するのに殆ど半日を費してしまつた。しかし、けふはこの日頃になくいかにも赫かしい、充實したやうな日のやうにおもへる。もう一度、ブラアムスのアルト・ラプソデイを聽きたいのも我慢しなければならないほど疲れてゐるが、それすら生の充足からくる疲れのやうに心愉しいものがある。

一九三九年十二月十九日、鎌倉にて

リルケの「窓」

私はいま自分の前に「窓」といふ、挿繪入りの、薄い、クワルト判の佛蘭西語の詩集をひろげてゐる。その表題の示すごとく、ことごとく、窓を主題にした十篇の詩を集めたもので、そのおのおのに一枚づつ挿繪が入つてゐるのである。

その詩のいづれもが、とある窓の下を通りすがりにちらつと垣間見たその内側の人生だの、或はその窓のみを通してその内側の人生と持ち合つたはかない交渉だのを歌つたものだが、所詮さう云つたはかなさそのものこそ此の人生にいかにも似つかはしく、さういふ點からしてもそれ等のふとゆきずりに見たやうな窓といふ窓がこのわれわれの人生に對して持つてゐる大きな意味——さう云つたやうなものが知らず識らずのうちにわれわれにひしひしと感ぜられて來ずにはおかないのである……

それ等の詩はどれも難解といふほどではないが、ちよつと風變りな佛蘭西語で書かれてあるので、私などにはすつかり呑み込めないやうな奴がないでもない。そんなのにもしかし挿繪がついてゐるので、ともかくも大體の意味はわかる。若い女の畫家の描いたものらしいが、（ひよつとしたら少女かも知れない）繪そのものはいかにも素人らしくつて、稚拙だ。

私はいまその十篇の詩の大意を、その挿繪でもつて補ひながら、此處に書き竝べて見るが、それがおのづから一つの人生風景を美しく繰りひろげてくれたら好い。

I

最初の詩は、われわれがバルコンの上だとか、窓枠のなかにちらりと現はれたのを見たきりで、姿を消してしまつた女の、われわれの心に殘す何とも云ひやうのない寂しさを歌つてゐる。

が、もし彼女がその髪を結はうとして
腕を上げたなら、やさしい瓶よ、
いかほどそれによつて私達の無氣力は
たちまちに力づけられ、そして

私達の不幸はその光輝を增さうものを。

挿繪は、その窓枠のなかに一人の女が裸かの腕をもち上げて髪を結はうとしてゐる姿をちらりと見せてゐる。明け方、たつたいま起きたばかりのところと見える。窓枠の奥はまだ薄ぐらい……

Ⅱ

その次ぎの挿繪も、同じやうに、鼠色の窓帷のかげから何かの花を挿した花瓶を窓ぎはに置かうとしかけてゐる女の手だけをちらりと覗かせてゐる。――つい云ふのを忘れてゐたが、挿繪はみんなエッチングである。

さて、肝腎の詩だが、その詩の方にはそんな女の手さへまだ現はれてはゐないのである。さうして唯、その鼠色の窓帷がなんだかごそごそと動いたのが目に止つたきり。……それだけでももう、それを見た者の胸ははずんで、もうすこし待つてゐるやうにと合圖をされたのだらうかしらと思ふ。さうしてそれに應じたものかどうかと迷はずにはゐられない。が、それにして

も自分の待たうとする者は一體誰なのだ？

かうやつて路傍に佇んで、何か見知らぬ者にしきりに注意深くしてゐる自分、ひよつとしたら夢がかうやつて自分を立ち止まらせてゐるのではないかとまで疑ひ出してゐる自分、――こんな自分はいまを限りに、もう昔のやうな自分ではないのではないのか知らん？

Ⅲ

窓はわれわれの幾何學、――それはわれわれの大いなる人生を容易に區切つてゐる、非常に簡單な圖形だ。

お前の額縁のなかに
戀人が現はれるのを見る時くらゐ
彼女の美しく見えることはない。
おゝ、窓よ、お前は彼女の姿を殆ど永遠化する。

此處では偶然はすべて許されない。戀人は戀の眞只中にゐる。彼女のものになり切つた、さ

さやかな空間にだけ取り圍まれながら。……この明瞭な詩の挿繪は、なんのことやらよく分からない。一人の女の片手をちよつと胸にあてがつてゐる立ち姿が描かれてゐるが、さうやつて片手をしをらしく胸にあてながら、物思はしげに窓に倚つてゐる姿、――それこそ戀人の永遠の像だといふのであらうか。此處のところ、どうもすこし詩よりも挿繪の方が晦澁である。

Ⅳ

第三の詩で窓を幾何學的なものとして取扱つた詩人は、こんどは反對にそれを海のやうに千變萬化のものとして取扱はうとしてゐるとでも云へようか？

挿繪もこんどはいくぶん詩に即してゐる。一人の女が窓のところに手をかけながら、沖を走つてゆく船へぢつと切なさうな目を注いでゐる。無雜作にひつかけた肩掛けを強い海風のなびくがままに任せながら……

窓よ、お前は期待の桝だ、――
一つの生が他の生の方へ

注ぎゆかんとしきりに焦つては
それを何度一ぱいにしたことか。……

Ⅴ

此處いらへんで、下手な譯だが、まあ一つ見本にその詩をそつくり譯してお目にかけて置くのも好からう。あんまり間違つてゐないで呉れるといい。

窓よ、何んとお前はすべてのものを
そんなに儀式ばらせてしまふのだ！
お前の窓枠の中に、ぢつと立つたきりで
何者かがよく人を待つたり、物思ひにふけつたりしてゐる。
そんな放心者だの、怠け者ばかりを
お前はお前の侍女に立たせてゐるのだ。
彼女はいつも同じやうな恰好をしてゐる。

彼女は彼女自身の繪姿になつてしまふ。

又、漠とした倦怠に沈みながら、
子供がそれに靠れて、ぼんやりしてゐることがある。
その子は夢みてゐるのだ。そしてその上衣の汚れるのは、
その子のせゐではなくて、ただ時間のせゐなのだ。

又、戀人たちが、窓に倚つてゐることもある。
身じろがずに、いかにも脆さうに、
あたかもその翅の美しいために、
貼りつけられてゐる蝶々のやうに。

この詩の挿繪は、窓から三人の少女が顔を出してゐるところが描かれてゐる。その中の一人の少女だけが唐草模様のある欄干に腰かけて、何かをしきりに見ようとしてこちらへ體を捩ぢ向けてゐると、その背後からも二人の少女が肩に手をかけ合ひながら、やつぱりこちらへ注意

深さうな目を注いでゐる。

VI

この第六の詩にだけは特に「朝の窓」といふ傍題が附せられてゐる。
まだ部屋の奥にある寢臺のあたりは暗くつて、そこに寢てゐる者が誰だかさへもはつきりとは見分けられない位。だが窓ぎははもう徐々に明るみ出してゐる。そのとき突然、寢臺から飛び下りて、その窓ぎはに走りより、それに倚りかかる者がある。それは一人のみづみづしい少女だ。

その窓から少女の見上げてゐる曙の空には、しかし、それを見上げてゐる彼女自身の他には何も見えまい。その大空たるや、その深みにせよ、その高さにせよ、全くその少女とそつくりな生き寫しであるから、——ただ、その空中にやさしく飛び交つてゐる澤山の鳩たちを除いたら。——

この「朝の窓」と題された一篇の大意はまあさう云つたものだが、挿繪では、一人の裸體の

少女がいま目を覺ましたばかりと云つたやうに、寢臺の上で半ば身を起しながら、窓のところに飛んできた二羽の鳩を無心さうに眺めてゐるところを繪にしてゐる。これでは、詩にあるやうに、その少女が夜そのものからのやうに寢臺から夜間着のまま拔け出し、窓に駈けよつて、身じろぎもせずに自分の新鮮な若さそのもののやうな曉の空を見入つてゐる、と云つた何か潑溂とした感じがあまり出ないやうだ。まあ、この挿繪は所詮讀者が詩を解するための何かの役に立てばいいと云つた位に考へてやつて置いた方がいい。餘人は知らず、少くとも私のためにいままでその方ではかなり役に立つたのだから、いまさらそれを知らん顏して、挿繪の惡口ばかり云ふのもすこし氣がさすといふもの。

VII

とは云へ、この次ぎの頁をめくつたら、いやはや、一番困りものの挿繪が出て來てしまつた。どう見ても美しいとはいはれない女がぼんやりと窓のところで頰杖をついてゐる……

その物思はしげな女の繪と詩との關係もよく分からない。まあ、大體この七番目の詩そのも

のが私にはよく分からない。意味は分かつても、その分かつた範圍だけではどうも面白いと思へない。こういらへんから、詩集全體がどうも少し倦れてきたやうに見える。

この詩はその前の「朝の窓」に次いで、さまざまな夜の窓を歌つてゐるものと見える。狹い、限度のある部屋に闇を增させて無限の擴がりを與へることも出來る窓、昔その傍らで一人の女が俯向きながら、身じろぎもせずに、靜かに縫ひ物をしつづけてゐたこともある窓、等々……

VIII

此處にも、いまのと似たり寄つたりの挿繪がついてゐる。しかし、詩にはずつと卽してゐるから好い。その若い女は、何時間も何時間も、無心さうに、しかも緊張した面もちで、その窓に靠れながら過ごす。獵犬が横になるや、きちんとその兩足を揃へるやうに、彼女の夢の本能といつたやうなものが、先づ、彼女のしなやかな兩手をきちんと揃へさせる。それからはじめてその腕だとか、胸だとか、肩だとかがめいめいの配置につく。さうしていつまでもさうやつて凝つとしたまま、それらのものは「もういいの」なんぞとおくびにも出さない……

IX

九番目の挿繪は、これまでとはぐつと異つて、二本の木立ごしに或アパアトらしい二階建の小家をやや遠くに離して描いてゐる。二階には窓が三つ見え、地階には扉と窓が一つづつ見える。二階の一番左端の窓はひらかれて、窓帷をもたげながら一人の女が立つてゐる。それから地階の中央の窓からはやつぱり一人の女が格子ごしに顔を出してゐる。その上方の窓も、同じやうにひらかれてはゐるが、窓帷がひつそりと下がつたまま、人かげはない……

さて、本文だが、その挿繪で補つて見ても、いまのところ私にはよく分からない。ただ、どうもその挿繪のなかで、窓帷で覆はれたまま何も見えない窓が、この詩の對象になつてゐるのらしい。その誰もゐない窓こそ、自分の歎きの原因だが、それの正體を知らうにはもう遲過ぎる、(それともまた早過ぎるのかしら?)いまは窓帷がそれをすつかり覆つてゐる、——と云つた意味らしいが、この自分の解釋には自信はない。ただ

Sanglot, sanglot, pur sanglot!

嗚咽よ、おゝ、いみじき嗚咽よ!

といふこの詩の第一行を口のなかで繰り返へし繰り返へししながら、その何かしら佗しげな挿繪を見てゐると、その詩趣が分かつたやうな分からないやうな裡にも、少しづつ自分の身についてくるやうな氣もしないことはない。

X

さて、最後の詩である。これはなかなか好い詩だ。挿繪は一人の若い女が窓に身をのり出して、去りゆく戀人に向つて絶望したやうに手を振つてゐる。髪さへふりみだしながら……

別れの窓に身をかしげてゐた
お前を見たがためだつた、
私が自分の深淵のすべてを理解し、
それを嚥み込んだのは。

闇の方に差し伸べたお前の腕を
私に示しながら、お前は
私の裡ではとつくにお前から離れてゐたものを、
徐かに私から離し、私から出て行かせた。……

お前の身ぶりは、本當に
大いなる別離の印だつたのだ？
それが私を風に變化させ、
私を流れの中に注ぎ込ませたほどに……

ノオト

この詩集の著者はライネル・マリア・リルケ。――この「窓」(*Les Fenêtres*) 一卷は、この詩人がその晩年「ドウイノ悲歌」などを完成した後、即興的に佛蘭西語でものしたいくつかの小さな詩集のうちの一つである。それにどうも些か稚拙がすぎるやうな挿繪をもつて飾つたのは、この詩人の年少の女友達らしい、バラデインといふ閨秀畫家。詩人の死後、一九二七年に五百部を限つて刊行せられた。その書肆はリブレリイ・ド・フランス。

リルケにはかういふ挿話がある。「リルケの思ひ出」といふ本を書いた、トウルン・ウント・タクジス公爵夫人といふ婦人が、その本の中に引用してゐる詩人の手紙の一節に據ると、――一月の或日(それは一九一三年のことで、リルケは巴里に居た)詩人はなんとも説明しがたい誘引を感じて、聖ルイ島の、ホテル・ラムペエルの方へ向ひ、アンジュウ河岸に沿つて歩いて行つた。一つの町から他の町へと、簇がり起つてくるさまざまな思ひ出に一ぱいになりながら。それは本當に奇妙な午後だつた。町々の、注意深く覆はれた、ひつそりした、高い窓の下を通りかかると、きまつてその窓帷がふいと持ち上げられたやうな氣がし、そしてそれが何んだか自分のためにされたやうに思は

れるのだつた。その度毎に、自分が其處へはひつて行きさへすればいい、さうすれば何もかもが、そこいらに漂つてゐる匂まで、説明されるやうな氣がされた、――恰も自分が其處ではずつと前から待たれて居つて、そしてその中へ自分がはひつて行く決心さへすれば、それらの暗い、厭はしい家は思はずほつとするであらうやうな……

この「窓」一卷を成してゐるすべての詩は、さういつた詩人の巴里滯在中のかずかずの經驗を背景にしてゐるのであらう。一九一九年以來、殆どその晩年を「ドウイノ悲歌」を書くために瑞西に隱栖してゐた詩人も、ときどきその好きな巴里にだけは出て來たらしい。しかし巴里にゐても殆ど彼が何處でどう暮らしてゐるのかは誰にも分からなかつた。時としてリュクサンブウル公園などで小さな手帳をとり出して即興的に短い詩などを書き込んでゐる、いかにも人生に疲憊したやうな詩人の姿が見うけられたとも云はれる。……

これらの未熟な佛蘭西語で書かれた即興詩だけではこの大いなる詩人の全貌が窺へないことは云ふを俟たない。しかし、これらの詩の或物、――たとへばその最後の「窓」の詩など――にも、詩人の心血を注いで書いた「悲歌」の沈痛なアクセントのほのかな餘韻のやうなものは感ぜられるのである。

一九三七年二月

更級日記など

――日本の古典に就いての若干の問に答へて――

御質問にお答へするほど、日本の古典をよく讀んでゐませんので大變困りましたが、

一、僅かに讀んだものの中では、「更級日記」などが隨分好きです。理由と云つても別にありませんが、彼女の小さな夢を彼女なりに切實に生きたらしい、この「更級日記」の作者などが、何となく僕には血緣のあるやうな氣がするからです。

一、僕がそれから影響を受けたやうなものはまだ日本の古典の中にはありさうもありません。「源氏物語」などが樂にすらすら讀めるやうになつたら、或ひは大いに僕など影響を受けるやうになるかも知れません。しかし、生來註釋書などを讀むことは大嫌ひなので、いつになつたら讀めるやうになるのだか自分にも分りません。聞けば、谷崎さんが「源氏物語」の現代語譯を試みられていらつしやるとか、大いに期待してゐます。これは人の話などを聞いたり、その

梗概を讀んだりして空想してゐるのですが「若菜」の卷のあたり、それから「宇治十帖」などは隨分好きになれさうです。前半よりもずつと。そこに出てくる柏木とか、薫大將とかは、光源氏なぞより僕には親しみ深いやうな氣がされます。それから「窄き門」のアリサを彷彿せしめるやうな女性なども出てくるからです。そのうちにゆつくり讀んで、ラジイゲが「舞踏會」をマダム・ド・ラファイエットの「クレエヴ公夫人」の影響の下に書いたやうに、僕も古雅な味はひのある小説を書いて見たいものです。

一、僕も一しきり歴史小説を非常に書きたいと思つてゐたことがありました。その時は室町時代を背景にしたいと思つてゐました。僕は以前から西洋の中世期に一種の憧憬のやうなものを持つてゐますので、それに似た暗黒なる時代を、わが室町時代に求めようとしたのであります。そして僕の手本としてはクロオデルの「マリアへのお告げ」などを頭に浮べて居りましたが、中世期の詩を限りなく愛してゐただけで、加特力教に大して關心を有たなかつたやうに、佛教に對する素養が全然無かつたので、そんなことから僕の企ては他愛もなく蹉跌してしまひました。この頃、佐藤春夫さんの「掬水譚」を讀んで、さういふ點で大いに教へられるところ

がありました。僕もそのうちもう一度勉強し直して、さういふ歴史小説も手がけて見たいと思つてゐます。

一、いづれもそのうちしたい、したいと云ふやうなものばかりで、只今やり出してゐるやうなものは一つもなく、お恥しい次第ですが、それでもときどき丸岡明君に誘はれて能などを見物に行く度毎に、急にさういふものに對する情熱などが湧いてきたりして、それを抑へつけるのに少々手こずる位になることもありますから、僕にもまづ脈があるものとお思ひ下さい。

一、能といへば、僕には何度見に行つても能の見方はいつまでも極めて未熟です。大體、梅若万三郎が演らうが誰がやらうがそんなことは無頓着で、ただ能の樣式のもつてゐるその雰圍氣――特にそのアクセントのやうなもの、さういふものをしか見てゐないからです。で、寧ろ、何度も見てゐるうちに自分も見巧者にならうといふやうなことは考へずに、西洋人がはじめて能を見た場合などに感ずるにちがひない子供らしい新鮮な氣持――そんな氣持でいつも見てゐたいのです。クロオデルが「能」について書いたエッセイなどが、そんな僕には一番鑑賞の役に立つてゐる所以です。

一、クロオデルと云へば、その能に關するエッセイの一節に、「我々の眼前にて一瞬間に構成せらるる彫像のごとく、夫が、その妻の前をふり向かうともせずに通り過ぎんとする刹那、その愛する者の肩の上に置くその腕のなかの何といふ優美さ、そして我々の繪入新聞の中に見かけらるるごときかかる悲哀の俗な動作も、それが緩やかに注意ぶかく、行はれるとき、何とそれは深い意味をもつことだらう、」と書いてゐますが――この數行などのうちに、きはめて暗示的にではありますが。あらゆる日本の古典の樣式美といつたやうなものが要約せられてゐるやうに思ひます。

一、前にも述べましたやうに、いくら讀みたくとも「源氏物語」などは原文ではなかなか讀めさうもありませんので、只今のところ敬遠してゐる他はありませんが、能になりますと、ぼんやり見てゐればそれだけでも何か解つてくるものがある、それが何か僕には貴重なものに思へますので、ときどきこれからも機會ある毎に、丸岡君に連れていつて貰ふつもりです。甚だ勝手なことばかり書いてしまひましたが、どうか惡しからず。

一九三六年五月

魂を鎭める歌

――いかに古典を讀むかとの問に答へて――

今夜、伊勢物語を披いて居りました。そのうちふいと御誌からのお訊ねを思ひ出しましたので、とりあへずペンを取つて、只今、考へてをるがままに書いて見ることにします。

僕がこのペンを取るまで、氣もちよく讀みふけつてゐた伊勢物語の一段はかういふのです。短いものなので、全部引用して見ませう。

むかし、男ありけり。人の娘のかしづく、いかでこの男にものいはむと思ひけり。うち出でむこと難くやありけむ、もの病になりて死ぬべき時に、かくこそ思ひしかといひけるを、親聞きつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ來りけれど、死にければ、つれづれとこもりをりけり。時は六月のつごもり、いと暑きころほひに、宵はあそびをりて、夜ふけてややすずしき風吹きけり。螢

たかくとびあがる。この男、見ふせりて、

とぶ螢雲の上までいぬべくば秋風ふくと雁につげこせ

くれがたき夏の日ぐらしながむればその事となくものぞかなしき

かういふ一段を讀んでをりますと、何かレクヰエム的な、――もの憂いやうな、それでゐて何となく心をしめつけてくるやうなものでいつか胸は一ぱいになつて居ります。「宵はあそびをりて」――自分ゆゑに死んでいつた女の棺の前で、男はその魂を鎭めるために音樂などをしてその宵を過ごしてゐた。「夜ふけてややすずしき風吹きけり。螢たかくとびあがる。」もうなすわざをやめて、横になつてゐた男は、その螢に向つて、死者の魂をもう一度戻すやうに「雁につげよ」と乞ふやうな氣もちになる。昔は、雁にかぎらず、鳥はすべて魂を運ぶものと考へられて居たからである。――その次ぎの歌は、それと同じ夜に歌つたものではなく、それから數日といふもの、ずつと喪にこもつてゐた男が或夕ぐれなどにふと歌つたものでありませう。「その事となくものぞかなしき」――別に自分がしたしく逢つてゐた女と死別したのではない。

だから、その事と思ひ出して悲しむ節はないけれど、自分ゆゑ死んだのだといふ事を考へるといかにも不便な氣がして、長い日ねもす思ひつづけて男はもの悲しさうになる。――そのうつけたやうな男のおもはず洩らす溜息までが手にとるやうに聞えてくるやうな一段であります。

この一段は、古註によりますと、萬葉集卷十六の車持氏の娘子の戀二夫君一歌を採つて一篇の物語としたのであらうと言はれて居ります。ついでに、その萬葉集の歌といふのも引用して見ませうか。

夫君に戀ふる歌一首并に短歌

さにづらふ　君が御言と　玉梓の　使も來ねば　思ひやむ　わが身一つぞ　ちはやぶる

神にもな負せ　卜部ませ　龜もな燒きそ　戀しくに　いたきわが身ぞ　いちじろく　身

にしみとほり　むらぎもの　心くだけて　死なむ命　俄かになりぬ　今更に　君か吾を

よぶ　たらちねの　母の命か　百足らず　八十の衢に　夕占にも　卜にもぞ問ふ　死ぬ

べき吾がゆゑ

反歌

卜部をも八十の衢も占問へど君をあひ見むたどき死らずも

或本の反歌に曰く

吾が命は惜しくもあらずさ丹づらふ君に依りてぞ長く欲りせし

右傳へ云ふ。時に娘子あり。姓は車持氏なり。其の夫久しく年序を逕て往來することを作さず。時に娘子係戀心を傷ましめ、痾疹に沈み臥しき。瘦羸日に異にして忽ち泉路に臨む。ここに使を遣して其夫君を喚び來る。しかるに獻歌流涕して斯の歌を口號み、登時逝沒りき。

この萬葉集の方では、戀患ひに窶れて、死んでゆく女がその臨終にかういふ歌を口ずさんでいつたといふ事になつて居ります。それを伊勢物語では、男の方の氣もちを主として書いてゐる。萬葉集の方ではどこまでも萬葉的に直截で、さういふ殆ど死なんとしてゐる女にこれだけの呼吸のながい歌なんぞは到底詠めさうもないことだと僕たちには思へるのだけれど、これをさういふ哀れな女の辭世としてどこまでも讀者に味はしめずにはおかない。その方が直截に人

の心に響くからである。だが、ひよつとしたらこれはその不幸な若い女の死を哭し、その魂を鎭めるために近親の者がその女の心もちになつて代つて詠んだものかとも考へられる。さうやつて、その死を哭し、魂を鎭めるためにはあくまでもその死者の心と一つになり切らずにはをられぬところに萬葉びとの萬葉びとらしいところがあつたのではないか。それが伊勢物語の頃までくると、同樣に哀れな女の死に對する人々の態度もそんなには慟哭的でなく、同情的ではあるが、だんだん情緒的なものになつて來つつあるのが、この二つの例でもわかるのであります。

午前、僕はリルケの「ドウイノ悲歌」の一節を讀んでをりました。（これは最近芳賀檀君が非常に骨を折られて全部譯出せられました。――しかし此處には、便宜上、その一節の大意を拙譯いたして置きます。）

夭折した者たちは、もう私達を必要としないのだ。
彼等は徐かに地上の事物から離れてゆく、丁度

母から乳離れてゆくやうに。しかし
屢〻歎ひといふわざによつて倖せな進歩を遂げても來た、
いつも大いなる神秘を必要とする、私達の方こそ、
それらの夭折者たちなしには生存し得ないのではないか。
昔、リノスの夭折のための慟哭が、
凍えついたやうな虚無を貫いて、
はじめて音樂となつたといふ、かの傳説は空しいものであらうか。（第一の悲歌）

リルケがその畢生の大作、「ドウイノ悲歌」を歌ひはじめるにあたつて、先づ胸中に絶えずおもつてゐたことの一つは、音樂の始原は美青年リノスの突如とした死に對する人々の慟哭にあつたとする希臘人たちの考へと等しく、詩歌の發生もまたあらゆる神に似た夭折者たちを哭し、その魂を鎭めんがためであつたといふ考へではなかつたでありませうか。唯、そのやうな希臘人たち乃至リルケの考へ方が私達の素朴な祖先たちのそれとやや趣を異にするのは、さう

やつて愛する者の突如の喪失によつて其處に生じた空虚がはげしく震動し、それが遂に一つの旋律に變じてわれわれの恍惚となり、慰撫となり、救濟となつたといふ、いかにも自らを基準とした、彼等の西洋流な受け入れかたであります。私達の祖先らは、人の魂といふものをどこまでも外在的なものと素朴に考へて居つたやうであります。それゆゑ、それが結局は自分の慰めとなり、救ひともなることを少しも思はずに、唯、死んだ相手の魂を鎭めることのみをひたすら考へてゐたものと見えます。

さういふいくぶんの相違はあるやうでありますが、少くとも詩歌とか音樂とかの源泉についての考へ方が、おのづから東西軌を一つにしてゐるらしいことは、只今の僕には大へん難有い發見であるといはなければなりません。

前述の伊勢物語の一段、及びそれと關聯した萬葉集の歌一首のことを語つてゐるうちに、いつのまにかかういふリルケ詩中の希臘の傳説にまで及びましたが、かかる考への推移は僕には殆ど偶然でありました。このリノスの傳説にもつと近いものを求めようとしたら、或は古事記あたりに發見せられたでもありませう。しかし、いますぐ僕には思ひつきませんし、それを調

べてみるいとまも今はないので、これで御免を蒙つておきますが、僕がこれまでかうして書いて來たのは、さういふ東西の詩歌の源泉についての考への類似にただに興味を抱いたからばかりではありません。

ただ、或はかういふ日本の古い歌物語だの、或はかういふ西洋の輓近の詩だのを前にしながら、文學といふものの本來のすがたを屢ゝ見なほしてみたりする事は、あまりに複雜多岐になつてゐる今日の文學の眞只中に身を置いてゐる自分のごときものにとつては、時として、大いに必要なことではないかと考へてゐるからに他なりません。少くとも、僕は、さういふ古代の素朴な文學を發生せしめ、しかも同時に近代の最も嚴肅な文學作品の底にも一條の地下水となつて流れてゐるところの、人々に魂の靜安をもたらす、何かレクヰエム的な、心にしみ入るやうなものが、一切のよき文學の底には嚴としてあるべきだと信じて居ります。考へついたままに、順序もなく書いて參つたので、甚だ意に充たず、又、御質問の趣にも添はないものになつてしまひましたが、取敢へずお答へまで。

一九四〇年四月三十日

追記　折口先生の說によると、叙景歌といふものは、先づ最初、旅中鎭魂の作であつた。昔、男が旅に出るとき、別れにあたつて、女が自分の魂の半分を分割して與へる。又、男も自分の魂の半分を分離してわが家に留めるものと人々に信ぜられてゐた。旅中、その妻の魂を鎭めてしづかに自分に落ち着かせるやうにと、男はその日に見た旅の景色などを夜毎に詠んだのである。さういふ歌がだんだん萬葉の中頃から獨立して、純粹な叙景そのものの歌となつていつた。しかし、すべての日本の叙景歌の中にはさういふ初期のレクヰエム的要素がほのかに痕を止めてゐるのである。――そのやうにわが國に於ける叙景歌の發生を說かれる折口先生の創見に富んだ說は何んと詩的なものでありませう。僕はこの頃折口先生の說かれるかういふ古い日本人の詩的な生活を知り、何よりも難有い氣がいたしてゐる者であることを、この際一言して置きたいと思ひます。

リルケ雑記

巴里の手紙

ライネル・マリア・リルケは一九〇二年八月末はじめて巴里に出た。「美術叢書」(*Die Kunst*)を監修してゐたリカルド・ムウテル教授に囑せられてロダン論を書くためであつた。リルケは先づ、ソルボンヌ區トウリエ街十一番地に寓した。八月二十八日の夕方、妻クララに宛てて、「誰れももう疑へませぬ、私は巴里に居るのです、いま私の住まつてゐるこの一隅がどんなに物靜かであつても。私は唯一つの期待(une seule Attente)です。どんな風になることでせう？　私の部屋は三階か四階にあります(私はそれを數へようとはしませぬ)、そして私を得意にさせてゐるのは、この部屋には鏡のある煖爐、振子時計、それから二つの銀の燭臺があることです……」と書いてゐる。巴里とロダンと——この二つのものこそ當時のリルケにとつては彼のすべてであつた、と言へる。私は此處にその最初の巴里滯在中の詩人のすがたを彷彿せしめるに足りる三つの手紙を抄する。

後出の妻クララ及びロダンに宛てられた二つの手紙は、前述のトウイエ街の寓居で書かれたものだが、最初のルウ・アンドレアス・サロメに宛てて書かれた手紙は、その翌年ヴォルプスエエデに歸つて

から當時を追想して書かれたものである。この手紙の中に精妙に描かれてゐるいくつかの巴里の情景は、後日「マルテの手記」の中に殆どそつくりそのまま用ひられてゐる。

一　ルウ・アンドレアス・サロメに

一九〇三年七月十六日、ブレエメン郊外ヴォルプスエエデにて

愛するルウよ、巴里は私には、あの幼年學校時代とそつくりな經驗だつたと言つてもいいかも知れません。あの頃、大きな、心臓をしめつけるやうな驚きが、私を摑へてゐたのと同様に、巴里でもまた私は、それ等の何とも言ひやうのない混沌が人生と呼ばしめてゐるかのごとき、あらゆるものに對する恐怖に捕へられてゐたのでした。あの頃、子供の中の子供であつた私は、皆の間で孤獨でした。そして巴里でも、私は人々の間でどんなにか孤獨だつたでせう、そして私の出會ふすべての人々から、いつも知らん顔をされて居ましたことか。馬車は私のなかを通過しました。そしてその馬車の中でも、急いでゐるのなどは、私を避けようともしないで、さも輕蔑するやうに、私の上を走つて行きました。まるで古い水の溜つてゐる惡い場所の

上ででもあるかのやうに。私は就寢前に、屢〻ヨブ記の第三十章を讀みました。一語一語、それはそつくりそのまま私には眞實でした。そして夜なかに私は起き上り、大好きなボオドレエルの本、「小さい散文詩」を捜して、その中でも最も美しい詩、「夜の一時に」といふ詩を大聲で朗讀するのでした。その詩を御存知ですか？　それはかう始まるのです。「ああ、漸つと一人になつた！　いま聽えてくるものは、もはや歸りの遲れた、さも疲れたやうに走つてゆく、二三の辻馬車の音のみだ。これから何時間か、よし休息でないまでも、沈默は味へるだらう。ああ、漸つと暴虐な人間どもの顏は消え失せた。もはや私は、自分自身によつてしか苦しまされないのだ。……」そしてその結末の何といふ素晴らしさ！　それは祈禱のやうに起きあがり、立ち止まり、そしてそれから消え去る。ボオドレエルの祈禱。兩手を合せながらする、眞劍な、卒直な祈禱。――露西亞人のそれのやうに、不器用で、美しい祈禱。――彼、ボオドレエルにとつては、此處まで來るのに、實に長い道程を要したのでした。そして彼は膝づきながら、匍ひながら、やつと辿り着いたのでした。……去年の八月、私は巴里に來たのでした。それは丁度、町の木々が秋をも待たずに凋れかけ、暑さのために膨脹した、燒けつくやうな道路がい

つまでも盡きようとせず、そして人々はものの匂の中を澤山の悲しい部屋の中のやうに横切つて行くと云つたやうな季節でした。私は長い病院に沿うて行きました。その門は、性急さうな、そしてがつがつしたやうな憐憫の様子をして、大きく開かれてゐました。はじめて私がHôtel Dieu（市立病院）の傍を通りかかつた時、幌無しの辻馬車が一臺、丁度、その中にはひつて行くところでした。そしてその馬車の中には、一人の男が、まるで壞れた操り人形のやうに斜めに吊され、車の動搖する度毎によろめいてゐました。そしてそのだらりと前に垂れた、長い、灰色の頸には大きな膿腫が認められました。それ以來、殆ど毎日のやうに、私は一體どんな人々に出會つたと思ひます？　――彼等はさながら、ありとあらゆる苦惱、ありとあらゆる苦惱の建物ののしかかつてゐる下で、龜のやうに緩慢に生きてゐる、人像柱の破片です。そして彼等こそ通行人の中の通行人です。各々の運命のなかに、一人つきりに、打棄つて置かれたままで。人々は彼等から何か印象のやうなものは受けても、せいぜい新奇な動物――必要のために或る特殊な器管、たとへば空腹とか死などの器管の生じた動物――をでも見るやうな、冷靜な、客觀的な好奇心でもつて觀察する位なものです。彼等は、厖大な都會の、どす黑い、

不快な感じのする保護色をしてゐるのです。そして彼等を踏みにじつてゆく日々の歩みの下にぢつと我慢をして、まだ何かしらを待つて居なければならないかのやうに、頑强な甲虫のやうに生き續けてゐるのです。もう腐敗はしてゐるが、まだ生きてゐる、大きな魚の切り身のやうにぴくぴく動きながら。彼等は生きてゐるのです、本當に取るにも足らないもので。彼等の表面に附着してゐる塵や、煤や、泥だとか、犬の齒からこぼれ落ちたものだとか、何に使ふつもりだかも分らずに買つた、無意味な、壞れものなどで、生きてゐるのでした。おお、何といふ世界でせう！　カケラ、人間のカケラ、動物の一片、嘗つて在りしものの殘骸のやうなもの、これらすべてのものは、なほも動きつつあるのです。無氣味な風に吹き煽られて、入りまじりにくるくる廻り、廻らせられ、そしてそれから墜落し、しかも墜落しながら、また向きを變へて行きながら。

彼女の重い籠を壁の突き出たところに置いて憩うでゐる老婆もありました（ほんたうに小さな老婆で、彼女の眼は沼のやうに干上つてゐました）。そして彼女がその籠を再び取り上げようとした途端、彼女の袖からは、長い錆びた鉤が、手の代りに、のろのろと、ややつこしい風

に出てきて、そして籠の柄の上に、眞直に、そして正確に向つて行きました。それからまた古いナイト・テエブルの抽出を手にして、歩き廻りながら、それを誰にでも差しつけてゐる老婆もありました。その抽出の中には、二十ばかりの錆びた針がとろがつてゐましたが、彼女はそれを賣らなければならないのでした。――或る夕方（それは秋の末でした）、とある飾り窓に見入つてゐた私の傍に、一人の小さな老婆が寄つて來ました。彼女はぢつとしてゐました。私は彼女も、私と同じやうに、其處に並べてある品物を見入つてゐるのだと思つてゐました。で、私は彼女にはあまり注意しませんでした。が、突然、彼女が私の眞近にゐることが妙に氣になつて來ました、何故とも知らず、私はいきなり、彼女の奇妙に重ね合はされた、擦り切れた手へ目をやりました。すると、その兩手の中からは、古い、長い、細い鉛筆が、實にのろのろと、出かかつてゐるのでした。それは少しづつ大きくなつてきました。その鉛筆が、すつかり現れて、その慘めな姿をさらけだすまで、まだなかなか時間がかかることでせう。私は、この情景のなかで何がこんなにも自分をぞつとさせてゐるのか、知りませんでした。が、それは恰かも、私の目の前で、一つの運命が、長い運命が、その傷ましいカタストロフが（その鉛筆が止まつ

て、その悲しげな、空虛な手の上にかすかに顫へながら凸出する瞬間まで、高まつてゆくところの）、演ぜられてでもゐるかのやうでした。私は遂に、その鉛筆を買はなければならないことが分りました。

そしてそれから、一八八〇年代の天鵞絨の長い外套をきて、使ひ古しの帽子の上に造花の薔薇をつけ（その帽子の下からは毛髪の束がはみ出してゐました）、足早に人々の間を通り抜けてゆく老婆たちもありました。これらの人々は、男でも女でも、皆、或る過渡期に面してゐるらしいのですね。その或者は精神錯亂から恢復への途にあり、また、或者は狂氣への途にあるのです。そして誰もかもが、その顏の上にきはめて微妙な或る物を持つてゐます。それは愛とか、知識とか、喜びとかいつたやうなものであり、それは今こそ、ほんの少し暗くなつて、落ちつかなさうにしてゐますが、誰かがちよつと注意をして、その面倒を見てさへやれば、すぐにまた元のやうに明るくなる光のやうなものなのです。……が、彼等を救つてやるものは一人もゐないのです。最初ただびつくりし、恐がりながら、ほんのちよつとばかり途方に暮れてゐるとき、彼等を救つてやるものは一人もゐないのです。自分の讀んでゐるものがよく分らなく

なり出してゐる者、まだ我々と同じ世界に住んでゐるのだが、ただ幾分斜かひに歩くので、度度、事物が自分の上にのしかかつてくるやうな氣のしてゐる者、ちつとも町を知らないので、果てしのない、意地悪な森の中のやうに、その中でまごまごしてゐる者、毎日毎日が苦痛である者、喧噪のなかで自分の意志を聞きとれずにゐる者、苦悶に壓しつぶされてゐる者、――この大きな都會のなかで、誰一人、さういふ者どもを救つてやらうとはしないのでせうか？

こんなに急ぎ足に町を通り過ぎてゆく、彼等は一體何處へ行かうとしてゐるのか知ら？　彼等は寢るときは、何處に寢るのか知ら？　そして寢られないときには、彼等のもの悲しげな眼の前を、一體どんなものが通り過ぎるのか知ら？　一日中公園に坐りこんでゐるとき、彼等はどんなことを考へてゐるのか知ら？　よつぽど遠くからでも一緒になりに來たかのやうな兩手の中に、顏を突込んで。そして彼等の脣が合はさり、もぐもぐ動くとき、一體、どんなことをひとりごちてゐるのか知ら？　彼等はまだ本當の言葉を綴つてゐるのか知ら？　彼等が口にしてゐるのは、まだ普通の文句なのか、それともまた、火事になつた劇場から、見物人も俳優も、聽衆も立役者も、何もかも一しよくたになつて飛び出してくるやうに、何もかもがごつちやに

なつて彼等の口から出てくるのでせうか？　彼等が亡びた少年時であることを、そして又、衰へた力であり、崩壞した愛であることを、誰一人思はないのでせうか？

おお、ルウよ、私は毎日毎日こんな風に自分を苦しめてゐたのです。何故なら、私はそれらの人々を理解してゐたからです。そしていかに私が彼等のまはりに大きな弧を描いて居ようとも、彼等は私にはどんな秘密をも有たうとしないのでした。それは私自身から私を引き裂いて、彼等の生のなかへ入り込ませずにはおかないのでした。彼等の生のすべて、彼等の重苦しい生のすべてを通して。……これらの打ち棄てられた人々の笑ひくらね、みじめな笑ひはありませぬ。彼等が笑ふ時には、それは彼等の中で何かが墜落したやうな音を立てます、何かが墜落し、碎け、そして彼等をその破片で一ぱいにしてしまふやうな。……或る日のこと（それはかなり早朝でした）、私は國立圖書館へ行かうと思つて、サン・ミッシェル通りを歩いて居りました。私は一日の大部分をその圖書館で過ごす習慣になつてゐたのです。私は歩きながら、朝が、新しい日の第一歩が、こんな都會でさへも、新鮮と快活と元氣とを隅々まで行き渡らせてゐる、すべてのものを愉しんで居りました。車輪の赤い色までが、花瓣の上のやうに冷たく

しつとりとしてゐて、私を愉しませてゐました。それから町のはづれを、誰かが明るい緑色のものを運んでゆくのも、私を愉しませました、――それが一體何であるのやら、私には分りませんでしたけれど。撒水車がゆつくりと登つてきました。その管からは水が若々しく明るく噴出してゐました。そして、まぶしいほど光つてゐる道路を、いい具合に暗くしてゐました。きらびやかな馬具をつけた馬が何頭も疾走し去りました。そしてその蹄は千のハンマアのやうな音を立てました。物賣りの叫び聲はいろいろに變りました。はじめは輕く昇つて來ますが、そのうちだんだん高くなつて來るのでした。そして野菜類は、手押車の上にまるで小さな畑のやうに進んで來るのでした。そして彼等の上には、獨特な、自由な朝があり、そして彼等の中には、闇と緑色と露とがあるのでした。そして一瞬間、それらの物音が途絶えてひつそりとすると、私の頭上の何處かで、窓を開けるらしい音がするのでした。……

そのうちに私の方に向つて歩いてくる人々の異常な擧動が、突然、私の目に止まりました。その大部分は、後ろを振り向き振り向き、こちらへやつて來るのでした。そのため私は彼等に衝突しないやうに氣をつけてゐなければなりませんでした。中には、その場に立ち止つたまま

でゐる者もありました。私はそれらの者の視線を追ひながら、私の前に行く人々の間に、一人の痩せた、黑いなりをした男を認めることが出來ました。その男は歩き續けながら、兩手でもつて、いくら下げてもすぐに立つてしまふ、いかにも氣持の惡さうな外套の襟を下ろさうと努力してゐました。その努力は明らかに彼を夢中にさせてゐるやうでした。そのため、彼は屢、足もとに氣をつけるのを忘れてしまふと見え、何か小さな障碍物でもあると、それに躓いたりあわててそれを跳び越したりするのでした。ごく僅かな間に、何度となく、そんなことが繰り返されると、彼はやつと道路の方に注意を向けました。が、可笑しなことには、それにも拘らず、又二三歩すると、彼は躓き、そして何かの上を跳びはねるのでした。私は知らず識らず足を早めました。そしてその男のすぐ背後にまで近づき、始めて、彼のさういふ足の運動が平坦な歩道とは何の關係もないこと、そして彼が躓く度毎に、あたりをきよろきよろ見廻して、何か邪魔物を見咎めるやうなふりをするのは、ただ彼とすれちがふ人々を胡麻化すための手段にしか過ぎぬことを知り得ました。實際は、そんな邪魔物などは何もないのでした。そのうちに、彼の歩き方の不器用さは緩和し、そして今度はさつさと歩いて行きました。そして暫くの

間は誰の目にも止まらずにゐました。が不意に、彼の肩の上に再び不安が襲ひかかり、その肩を二度ばかり持ち上がらせ、それからそれを落させました。そのため彼の肩は、妙にねぢくれました。

その間も彼は歩き續けてゐるのです。が、私はその時、彼の左手が言ひやうのないくらゐ素早く外套の襟の方へ走つて、それをこつそりと摑み、そしてそれを立て、それから非常に細心に、兩手でもつて、その襟を下ろさうとするのを見かけて、どんなに驚いたことでせう。——それは最初の時と全く同じくらゐに、やりにくさうな手つきでした。それと同時に、彼は前へのめつたり、左へのめつたり、その上またシャツの襟までが彼を苦しめ出したかのやうに、といつて、高くさし伸べてゐる手はまだなかなかその仕事をすませさうもないかのやうに、自分の頸を何度となく伸ばしたり縮めたりしてゐました。が、とうとう、すべては再びきちんとなつたかのやうでした。彼は約十歩許り誰にも見られずに行きました。突然、肩の上下が再び始まりました。と同時に、カッフェの店先を掃除してゐた、一人の給仕は、手を休めながら、物珍らしさうに、身體を不意にゆすぶり、立ち止まり、それからぴよんぴよん跳びながら、再び

歩き出してゆくその通行人を眺めました。その給仕は笑ひ出し、そして店の内へ何やら叫びました。すると顔が二つ三つ、窓硝子の向うに現れました。が、そのうちにその見知らぬ男は、ステッキの丸く曲つた握りを彼の襟のうしろに引つかけ、そして歩き續けたまま、それを自分の背骨の眞上に、垂直に、押しつけました。それは人目につくやうなものではありませんでした。そして、それは彼をぢつと支へて居りました。この新しい動作は、その男を非常に落着かせたものか、彼は一瞬間全く輕快さうに歩いてゆきました。誰ももう彼には注意しませんでした。が、私は、一秒間と雖ももう彼から目を離すことの出來なくなつてゐた私は、しかし、少しづつまた不安が立ち戻つて來、それがだんだんに強まり、あちこちに現れようとしかけ、それが肩を搖すぶり、彼の均衡を失はせようとして頭にしがみつき、それから思ひがけずに足もとを襲つて、その歩調を亂し出すのを、逐一知つてゐました。勿論、誰もまだそれには氣がついては居りませぬ。ほんの短い間それもごく僅か殆どこつそりと行はれてゐたのです。が、そらもう其處に見えてゐます。目立ちかかつてゐます。私は、この男全體がいかに不安で充たされてゐるか、もう胡麻化しの利かなくなつたその不安が、いよいよ增大し、高まりつつあるか

を感じました。そして私は、彼の意志、彼の苦痛、そして千の舞踏への衝動でむづむづしてゐる、その頼りない肉體の一部にそれをしてしまはうかとしてゐるかのやうに、そのステッキをしつかと自分の背骨に壓しつけてゐる、彼の痙攣しがちな手の絶望的な動作をも、見拔いたのでした。そして私は、いかにしてそのステッキが、多くのものがそれに系つてゐる、或る根元的なものとなつたかを經驗しました。その男のすべての力、すべての意志が、そのステッキの中にはひり、そしてそれを一つの力、一つの實在（恐らくそれには彼を救ふ力もありましたでせうし、また病人は強い信念をもつてそれを頼りにしてゐたのです）にまで高めて行きつつあつたのでした。此處にこそ神が生れつつありました。一つの世界が彼に對抗して立ち上りつつありました。そして、かかる爭鬪の行はれてゐる間も、それを身うちに運びながら、その男は歩き續けようと努力してゐました。暫らく彼はいかにも心地よげに、そして苦がなささうに裝ふのに成功してゐました。今、彼はサン・ミッシェル廣場を通り過ぎました。そして非常に混雜してゐる馬車や歩行者を避けなければならぬことが、彼に異様な運動への口實を與へてゐたのに拘はらず、彼は全く平靜にしてゐました。そして橋の歩道にさしかかつた時分には、彼の

全身には奇異な、硬直した靜けささへ見られました。私はその時、彼のすぐ背後にまで近よつてゐました。もう自分のとは分ちがたくなつてしまつてゐる、彼の苦惱に引きずられるがままになりながら。――突然、橋の眞ん中で、ステッキが弛みました。男は立ち止まりました。異樣にぢつと、險しい姿勢で突立つたまま、そして身動きもしないで。彼はもう、すつかり諦めて待つてゐるのでした。が、彼の中の敵はそんな降伏を信じないやうでした。それは躊躇してゐました。――無論、それはほんの一瞬間でした。それからそいつは火事のやうに、あらゆる窓から一時に爆發しました。異樣な舞踏が始まつたのでした。……そのまはりにすぐさま形づくられた、人々の厚い圈が、私を次第にうしろへ押しやり、私にはもはや何も見えなくなりました。私の膝は顫へ出しました。そして何もかもが私から拔け出して行つてしまひました。私は一瞬間、橋の欄干によりかかりながら、立つてゐました。それからやつとこさ私は自分の部屋に歸つて來ました。こんなとき圖書館に行つたつて何になりませう。いま私の中にあるものを越えて私を進ませるほど充分に強い本なんぞが一體あるでせうか？　私はすつかり空虛になつたやうに感じました。他人の苦惱が私から糧をとり、そして私をへとへとに疲れさせてしま

つたかのやうに。……

二　妻クララに

一九〇二年九月十一日、巴里トウイエ街十一番地

……私は一日中、ムウドンの庭の中の、靜かな場所に坐つてゐました。廣びろと打ちひらけてゐる遠景を目前にしながら。私は自分の傍らに、雜誌で一ぱいになつた箱を持ち出し、そしてロダンに關する、印のついてゐる箇處を讀んでゐました。ロダンがこれらのすべての資料を一まとめにして置いたのです。が、「ラプリュウム」*の中に集められてある以外の、そしてより以上のものは、遂に一つも見出されませんでした。私達は中食を一緒に取りました。そしてその後で、他の人達が立ち上つてしまつてから、私達は一時間許り眞面目な話をしました。ロダンが語り、答へ、意見を述べてゐる間は、不思議なくらゐ私の心も落ち着くのでした。何といふ驚くべき均衡！　何といふ言葉の正確さ！　そしてその言葉が全く孤立するやうな時ですら、いささかもそれには曖昧なところも、躊躇ふやうなところもありません。それから私は五

時過ぎまで、私の仕事に夢中になつて庭の中にゐました。それから、涼しい、人氣のないムウドンの森に出かけました。私が其處から再び出て來たときには、家々は坂の上に煌(ひら)めき、綠色の葡萄畑は暗く浪打ち、空は廣びろとして靜けさに充ちてゐました。鐘が鳴りました。と、その音は上方にずんずん押し擴がりながら、狹いヴァルフルウリィぢうに一ぱいになつてしまひました。そして、それは到る處に――どんな石の中にまで、どんな子供の手の中にまで屆きました。何時頃から、私はこれらの田舍だの、空だの、廣がりだのを感じなくなつてゐたのでせうか？　あたかも自分が長いこと都會の中か、それとも牢獄の中に暮らしてでもゐたかのやうに。――そこで、私はこれらの事物に對して彼等の孤獨を感謝しました。そしてこの夕暮のすばらしさに、その最も小さな一員として、つつましやかに、物靜かに參與してゐるところの、どんなに小さな木の葉の前にも、私は感動させられました。……私はなほも暫らく、急勾配な屋根のある家々だの、その傍らに聳えてゐる御堂だのを眺めてゐました。其處には、言語を絕したやうな世界が、いつもかかる夕暮のやうな時間ばかりの續いてゐるやうな世界が、領してゐるやうな氣がされました。それから、私は沈んだ氣持で、町の方へ向つて行きました。あ

あ、何と夏の夕暮は重苦しいことか！　なんだかちつとも戸外にゐるやうな氣持がしません。——ものの匂や人の呼吸に包まれて。重たい大地の下になつてゐるかのやうに、ものみなが重苦しく、不安で。私は自分の顏を何度もリュクサンブウル公園の柵に押しつけました。少しでも空間を、靜けさを、月の光を感じようと思つて。——しかし、其處にもまた、同じやうに重苦しい空氣が、花壇の中に無理にぎつしりと詰め込まれた、あんまり多過ぎる花の香りのために、一そう重苦しくなつたやうな空氣があるばかりでした。……この都會は非常に大きいのです、しかもその隅々までがこんなにも悲しみで一ぱいになつてゐて……

三　オオギュスト　ロダンに

巴里、一九〇二年九月十一日、トゥイエ街十一番地

師よ、

貴方の御好意に甘えて、かくも屢、貴方にお目にかかることを許して戴いて居りますのにも拘らず、私が貴方にお手紙を差し上げるなんと云ふことは、さだめし御不審に思はれるかも知

れませぬ。が、いつも貴方の前では、私は自分の言葉の不完全なことが氣になつてならないのです。それがあたかも、貴方のすぐお傍にゐる時ですら、貴方から自分を引き離してゐる病氣でででもあるかのやうに。

それ故、自分の部屋に一人きりでゐる時に、私は翌日貴方に言ふべき言葉を一生懸命に用意するのです。が、いよいよその場になりますと、その言葉は生氣がなくなり、その上新しい氣持に襲はれて、私はどういふ風に言ひ現したらいいのか、すつかり分らなくなつてしまふのです。

ときどき私は佛蘭西語の精神を感ずることがあります。そして或る夕方など、リュクサンブウル公園の中を散歩しながら、私は次のやうな詩句を得ました。これは獨逸語から飜譯したものではなく、そしてどんな抜け道から、こんな形をして、立ち現れたのやら、私には少しも分らないのですが……

Ce sont les jours où les fontaines vides
mortes de faim retombent de l'automne,

et on devine de toutes les cloches qui sonnent,
les lèvres faites des métaux timides.

Les capitales sont indifférantes.
Mais les soirs inattendus qui viennent
font dans le pare un crépuscule ardent,
et aux canaux avec les eaux si lentes
ils donnent une rêve vénétienne…
et une solitude aux amants. (**)

**

何故、私は貴方にこんな詩句を書いたかと申しますと、これが何も良い詩句であると信じてゐるからではありませぬ。唯、自分を導いてゐて下さる貴方に、自分を近づけたいから許りで

あります。貴方こそは、この世の中で唯一人の、均衡と力とに充ちながら、御自身の作品とぴつたり調和してゐると自稱し得られる、御方でありませう。そして若しも、その偉大な、すこしも危氣のない作品が、私にとりまして、それに就いてはもはや畏怖と讃美とに溢れた顫へ聲でしか語ることの出來ぬやうな、一つの出來事となつたとしますれば、それらの作品はまた、貴方御自身のやうに、——私の生、私の藝術、私の魂のなかでも最も純粹であるところのすべてのものに對する、一つの御手本ででもあるのであります。

私が貴方の許に參りましたのは、何も研究をするため許りではありませぬ、——それは、如何に生くべきか？　といふことを貴方にお尋ねしようと思つてでありました。そして貴方はそれに對して、仕事をなさりながら、お答へになられた。私にはそれがよく解りました。仕事をすること、それは死なしに生きることであることを、私は感じました。私はいま、感謝と喜びとで一ぱいになつて居ります。何故なら、私はごく若い時分から、仕事以外のものを求めませんでした。そして私は努力いたしました。が、私の仕事は、それを私が非常に愛してゐたがために、いつの間にか、稀有な靈感に起因する、大袈裟な行事、お祭り騒ぎになつてしまひまし

た。そして、徒らに、唯、創造的な時間の來るのを、無限の悲しみをもつて待つてゐるのみ、といつたやうな數週間がありました。それは深淵に充ちた生でありました。私は靈感を喚ぶためのあらゆる人工的な方法を恐ろしげに避けて居りました、私は葡萄酒（ずつと前から嗜んでゐた）も廢するやうになりました、私は自分の生を自然そのものに近づけようと努力いたしました。……が、確かに合理的であつたあらゆる方法の中で、仕事をしながら、遠い靈感を獲得するといふ勇氣だけが私にはありませんでした。いま、私はそれのみが靈感を保つてゐる唯一の方法であることを知り得ました。――そしてそれは、貴方が私に與へて下さつたところの、生と希望との大いなる再生であります。それから私の妻のことを一寸申しますが、實は去年、私達は非常に大きな負債をしてそのため大へん苦しみました。そしてそれはまだすつかり片がついて居りません。が、私はこれからは、自分の休みなき仕事が、そんな貧乏の苦しみをも取り除いてくれることと信じます。私の妻は、私達の小さな子供から離れなければなりませぬ。そしてそのことの必要は、妻も、私が彼女に貴方のおつしやつた「仕事と忍耐と」といふ御言葉を書いてやりましてからは、ずつと平靜に、ずつと正しく考へて居るやうであります。

私の妻が貴方のお傍に、貴方の偉大な作品のお傍にゐるやうになれば、私はどんなに幸福でありませう。貴方のお傍にさへゐれば誰も道に迷ふやうなことはありませぬ。

若し自分のやうな者にも、この巴里で、何等かの形式で、パンを得ることが出來ますやうなれば、私はそれをやつて見たいと思ひます。――（それとて私にはほんの僅かしか要りませぬ。）出來れば、私はもつと此處に止まりませう。さもなくて、若し私がうまく行かないやうでしたら、貴方がそのお作品や、そのお言葉や、貴方がその「主」であるところの永遠なお力のすべてでもつて、私を御助力くださつたやうに、私の妻をも御助力くださいますやうに。

貴方のお庭の沈默のなかに、私が居りましたのは、昨日のことでございます。いま、大都會の物音はずつと遠退いて居ります。そして私の心のまはりには深い沈默が領し、そしてその中には貴方の御言葉が彫像のやうに立つて居るのでございます。

では、今度の土曜日に。

頓首

貴方の

ライネル　マリア　リルケ

註　＊「La Plume」（美術雜誌）は一九〇〇年にロダン號を出した。

＊＊　大意。――「すつかり水の涸れてゐた、空つぼな噴水が再び落ち出す、秋の日々であつた。そして鳴りひびく鐘の音にも、彼等の金屬の脣のいかにも不安さうなのが感ぜられた。けれども、市中はそれには無頓着な樣子をしてゐる。と、突然夕暮がやつて來て、公園のなかには燃えるやうな薄明を生じさせ、ゆるやかに水の漂つてゐる運河にはヴェネチア風の夢を與へ、それから戀人達には孤獨をもたらす……」

或外國の公園で

「……伊太利は好い效果を與へてくれましたけれど、こんどは私には北方が、空間が、風が必要になつたやうな氣がいたします……」と、一九〇四年四月二十九日、當時羅馬に滯在してキエルケゴォル、ヤコブセン等の作品を好んで讀んでゐたライネル・マリア・リルケはそのスカンヂナヴィア在住の女友達エレン・ケイに宛てて書いてゐる。エレン・ケイはルウ・アンドレアス・サロメ等と共にリルケの最初の知己たちの一人で、その頃既にスカンヂナヴィアの各地で、いまだ無名に近かつたこの若い婦人に就いて、講演などをして紹介に努めてゐたものである。そのお蔭で、瑞典や丁抹なんぞにも此の詩人を愛する人々が既にかなりの數に上つてゐたらしい。その人達からの熱心な招聘の手紙が、春の羅馬にあつてなんの爲事もなさずに怏々としてゐたリルケのもとに遂に屆いたのであつた。

羅馬の春の印象は概して芳（かぐ）しくなかつた。といふのは、羅馬では、市中は巴里以上に雜沓し

て居り、しかも季節がきびしい冬から突然目くるめくばかり百花の咲き亂れる夏に交代してしまふからである。

徐々に變革する事を好む詩人、――あらゆる困難に打克つて花咲くために戰ひ拔いてきた最初の小さな花々をこそ愛する此の詩人には、それが何よりも堪へ難かつたと見える。五月、羅馬を逃れるやうに去つたリルケは、アシジ、ピサ、ミラノ、デュセルドルフ等に短い滯在をしつつ、六月スウエデンの片田舍なるボルゲビイ・ガアルといふ小さな町に著いて、其處のラルソン孃の許に寄寓した。それからその年の十二月まで、そのボルゲビイ・ガアルの他には、ヨンセレッド、コペンハアゲン等の友人の家々に逗留しつつ、その質朴な、愛すべき生活を共にしてゐた。

丁度二年前の夏の末（一九〇二年）巴里にはじめて足を踏み入れて以來、詩人を襲つた恐ろしいかずかずの經驗が、彼の裡に「マルテの手記」の重要なるモチイフとして生れたのは恐らく羅馬で、その著想は詩人がかうしてスカンヂナヴィアに氣儘な、愉しい、しかし殆ど無爲に近い日を過して居つた間に、漸く熟していつたのではあるまいか。

或日、彼はボルゲビイ・ガアルで次ぎのやうな詩を書いてゐる。ざつと大意を譯してみると、

或外國の公園で

（ボルゲビイ・ガアル）

二つの小徑がある。誰もそこには足を踏み入れない。が、ときどき、その一方の小徑にお前を想像裡に行かさせる。なんだか道を間違へたやうに見える。突然、お前は圓形廣場のなかにあの石を再び前にしながら一人きりになつてゐる。そしてその石の上に再び「ブリト・ゾフイ男爵夫人」と判讀する。――そして再び彼女の死んだ年齡を指先きでもつて知る。――何故、この發見はもつと意味が無くならないのだらうか？　お前は、濕つた、薄暗い、そして誰も近づかうとはしない、お前の楡の木蔭に、何故これが全くはじめてのやうに、そのやうに期待に充ちて、いつまでもぐづぐづして居るのだ？　そしてお前は何にそのかされたればとて、それと反對なものを、日の當つた花壇の中に、まるで薔薇の木の名前でも搜すやうに、搜してゐるのだ？　お前は何んでときどき立ち止まつては見るのか？　お前の耳は何を聽いてゐるのか？　そして何故、そんなうつけたやうな目ざしで、丈の高いフロックスの花のまはりを飛んでゐる

一匹の蝶を見つめ出してゐるのか？

詩人はその婦人の古い墓の前にいくたびか佇んだと見える。そしてその度毎に、その磨滅した石の上に指先きでもつて纔かにその婦人の名前と年齢とを認めるのである。いまも、再びその墓を前にしながら、詩人はしかしこんな事をしてゐるのはそれがはじめてでもあるかのやうに、いかにも期待に充ちながら、いつまでも愚圖々々してゐる。彼は、いま自分の感じてゐる死と反對なものを求めるかのやうに、日の當つた花壇の中に、何物かを捜してゐるのである。彼はときどき立ち止まつて耳を傾ける。そして彼の目はとうとう大きなフロックスの花のあたりを飛びまはつてゐる一匹の蝶を追ひはじめる。……此の詩に於いて、詩人が「お前」と呼びかけながら描いたもう一人の彼自身の、生と死との間を彷徨してゐる姿、しかし後年の詩人におけるやうにいまだその二つのものが一體とならず、死の考へが生きんとする欲望を暗くしてゐるやうな、まだいくぶん感傷的な青年の姿には、しかし充分に後の日のマルテの悲痛なる姿を彷彿せしめるものがある。

一九四〇年五月四日

（「新詩集」第一卷）

リルケとロダン

一九〇六年一月二十五日、ライネル・マリア・リルケはロダン夫妻と同行して、シャアトルの本寺（カテドラル）を見物に行つた。そのシャアトル行の狀況は、リルケがその妻クララに宛てて其日のうちにシャアトルで書いたのと、その翌日巴里から出したのと、二通の手紙に彷彿としてゐる。リルケの手紙の中でも特に興味深く思へる故、この手帳に全部書きとめて置くことにする。

＊＊＊

クララ　リルケに

シャアトルにて。木曜日零時半。

……今、私達はシャアトルに居る。先生と、奥さんと、それから私と。——私達は、冬の朝早く、まだ夜の明けぬうちに、新鮮な、眞珠母色の空の下を、出かけて來たのだ。それから私

達は、小さな、明るい、フランスの町に着いた。やがて、小さな、ごたごたとした家々の塊りの上方に、あたかも空中に咲いた花のやうな、一つのゴチックの塔と、それからその傍らに、もう一つの、ゴチックの蕾のやうな塔とが、立ち昇つて來るのが認められた。それから私達はそれらすべてを忘れ、見失ひながら、小さな路次をいくつも通り抜けて行つた、すると突然、私達は、私達の眼には見切れぬほど大きなものの、すぐ眞下に出た。そのものの大半は殆ど毀損してゐた。が、ところどころ、その一片々々が眸をひらき、夢み、永遠に向つて微笑みはじめた……折悪しく、とても寒くて、立つては居られぬ位。のみならず、雪さへ落ちてきた……

*

クララ　リルケに

ムウドン・ヴァル・フルウリイ。ヴィラ・デ・ブリランにて。金曜日、早朝。

……私達は疲れ切つて歸つて來た。天候は私達を散々な目に遇はした。なんだか無暗に寒いと思つてゐたら、雪がふりだし、やがてそれが小雨に變つたと思ふと、東風になつて、今度は

氷雨だ。何もかもが一日の中なのだからね、——本當にたつた一日の中になのさ、——驛への歸り道ときたら、殆ど一歩も進めないほどの悪天候だつた。だから、私達は非常に疲れてしまつたのだ。それに、私達はあんな廢墟だの、それから美しい事物の喪失にも增して耐へ難い、それを硬直させ、粗末にし、醜いものにさせてゐる、悪修繕だのを、見せつけられたことで、ひどく悲しくなつてもゐたのだ。シャアトルの本寺は、巴里のノオトル・ダアムよりも、ずつと傷んでゐるやうに私には思へる。ずつと絶望し切つてゐて、もつともつと破壞の手に身を打ち任せてゐるやうだ。それが大きなマントを被つて起き上つたかと見えたのは、ほんの第一印象に過ぎなかつた。それからやがて、その主要な細部(デテエル)である、風化して細つそりした天使が、一日の時刻を告げる日時計を自分の前に差し出しながら、浮き出てくる。そしてその上には、すつかり磨滅した中にもなほ限りなく美しく、その天使の歡ばしげな、敬虔な顏に漂つてゐる深い微笑が認められてくる、まるで空がそこに映りでもしてゐるやうに……

しかしそれが殆どすべてだつた。そして先生は、いまだにそれ等のすべてのものが來り、そして語るところの、唯一（恐らく）の人間なのだ。（若しそれ等のものが先生以外の者にも、ま

だいくらかなりと語るとしたら、どうしてそれを聞かずに居られたらう？　それを聞き洩らすやうなことをしたらう？）先生は、あたかもノオトル・ダアムにでも居るかのやうに、もの靜かに、落ち着いて、それ等のものを深く理解し、受け入れてゐられた。そして先生は、見るところことごとくその眼に入つてくるゴチックの大いなる原則によつて、御自身の藝術を確證せられてゐた。それに就いて何か低聲にひとりごちながら。それは非常に素晴らしかつた。九時半頃、私達は驛から本寺へ向つたのだつた。太陽は隱れてしまつてゐた。そして空は灰色になり寒かつた。が、ずつと風はなかつた。けれど私達が本寺の前に到着するや、思ひがけなくも、一陣の風が、並はづれた巨人のやうに、天使の一角を曲つて來ながら、私達の間を、無慈悲に、鋭く、身を切るやうに、吹き過ぎて行つた。「おお」と私は言つた、「これは嵐になりさうですね。」「君は知らないのだね、」と先生はその時仰言つた、「大きなカテドラアルのまはりには、いつも風が、さう、こんな風が、あるんだ。それはいつも、自分の偉大さに惱まされてゐる、騷がしい、悪い風に取り卷かれてゐるのだ。空氣が支柱を滑り落ちてくるのだ、あの高處から落ちて來ながら教會のまはりをうろついてゐるのだ。……」先生は、かう云つたやうなことを

仰言られた。勿論、もつと簡潔な、もつと充實した、そしてまたもつとゴチック式な言ひ方だつた。が、先生の仰言らうとした意味は、大體、さう云ふことだつたらう。そして、そのうついてゐる風の中に、私達は、天使の前に立たされた亡者共のやうに、突つ立つてゐた。そしてその天使は、いかにも、愉しさうに、その日時計の文字板を太陽の方へとさし向けてゐるのだつた。いつもそれが太陽に見えるやうにと……

＊＊＊

その頃、リルケはロダンの秘書となつて、そのアトリエのあるムウドンの家に寄寓してゐたのである。

リルケが始めて大彫刻家の許を訪れたのは、それから約四年前、一九〇二年の八月の末であつた。一書肆の囑によつて彼に關する小論文を書くため、ロダンに會ふべく、北獨逸の一寒村ヴォルプスウエデから、はるばる巴里まで出かけて來たのであつた。リルケはロダンに近づいて、ますますその人物と藝術とに心醉し、最初は短い滯在の豫定であつたが、とうとう一年以

上も巴里に居ついた。（その癖、彼は巴里がひどく嫌ひだつたらしい。が、その最初の滯在中の不安な異常の經驗が、後年「マルテ・ラウリッヅ・ブリッゲの手記」を生んだのであつた。）それからリルケは、遂に巴里を離れ、伊太利に赴き、ヴィアレッジオに二箇月近く滯在してから、漸くにして、妻や友人のゐるヴォルプスウエデに歸つた。それから今度は妻のクララを伴つて、再び伊太利に行き、羅馬に半年許り滯在してゐたが、それから又一人になつて、丁抹、瑞典、北獨逸等に轉々とした後、ロダンの招聘によつて三年ぶりで再び巴里に出て來た。ロダンは或日リルケと散歩してゐる時、「少し私の手傳ひをして呉れぬか。そんなに時間はとらせぬ積りだ。まあ、毎朝二時間許りのことだ。」と申出た。リルケの方でも、最近は病氣がちで、ひどく疲れてゐるやうなこの老藝術家が、身邊の雜用などに心を勞してゐるのを見かねてゐたところだつたので、躊躇することなく、その申出に應じた。そしてリルケは早速、ロダンの家の美しい庭に面してゐる小さな部屋に同居することになつたのである。それは一九〇五年の秋だつた。

翌年一月、シャアトル行の事があつた。その頃まで、ロダンとリルケの間は極めて圓滿に進

んでゐたと云つても好い。リルケがロダンのために費さねばならなかつた時間は、約束のやうに、午前の二時間だけではなく、殆ど一日中の大部分であつたけれど、最初のうちは、リルケはそれを不滿にも思はず、ロダンのために働いてゐた。――が、リルケにも、彼を待つてゐる仕事があつた。羅馬滯在中から計畫してゐる「マルテの手記」も、いまだに全然手を着けてゐなかつた。自分の仕事をするためには、一人きりにならなければならぬ。と云つて、いますぐロダンを見棄てるわけにも行かない。さう云つた焦躁が、少しづつリルケの上に襲ひ出してゐたやうに見える。……

かう云ふ兩者の狀態を考慮に入れて、シャアトル行のリルケの手紙を讀むと、その大いなる廢墟を前にした二藝術家の姿は、殊にそのカテドラアルの前に到着するや、急に險惡になつてきた空模樣の方をリルケが氣にしてゐるのを、ロダンが「カテドラアルの周りにはいつもこんな風が吹いてゐるのだ」とかなり烈しい語氣で語るあたりは、何とも云ふに云はれぬ小說的な效果を帶びて來るのである。――さう云ふ情景を冒頭に置いて、その後の二人の氣持が漸次離反して行く悲劇的な經過を、短篇小說にしてちよつと書いて見たいやうな誘惑をすら私は感ず

る程である。

リルケが、些細なことからロダンの激怒を買つて、「盗みをした下僕のやうに」そのムウドンの家から追ひ出されたのは、それから約四ケ月後の、五月の或日のことだつた。リルケは、一先づ、カセット街の或小さなホテルの一室を借りて、暫く其處に腰を据ゑることにした。さうして妻のクララには、唯、ロダンが病氣になつて田舍に靜養に行くことになつたので、自分だけはかうして巴里に止まる、やつと一人になつたのでこれからは大いに仕事をする積りだ、と言つてやつた切りである。それから又、二三日してから、クララに宛てて、「私の部屋は小さいけれど、小さ過ぎるといふ程ぢやない。あんまり風通しのいい方でもないが、息苦しいやうなことはない。使ひ古した道具で一杯だが、これといつて思ひ出が私をうるさがらせるやうなものもない。眞向ひには、修道院の樹木が、高々と空中に聳えてゐる。下方には古い塀が見える。まあ、何んとそれは雜色の、汚い廣告で一杯になつてゐることか！　が、その上方には、古い、穹窿狀の、よく日に焦げた、塀の屋根があり、更にその上方には、古い、大きな栗の木がある。それから又、そのもつと上方の、稍左よりには、教會の本堂の一角が、空の中に沈んでゐる、丁度海の中の難破船のやうに。そしてその上方にも、背後にも、右にも、左にも、——巴里が見える。明るい、絹のやうな、そしてその空や水のみならず、その花々の心臟の中まで、強烈な太陽によつて永久に蒼褪めてしまつてゐるやうな、巴里が見える。私は、若し彼がその大きな不安の時期を切り拔けられたならば、これ等すべてのものを私のやうに愛したであらう、マルテ・ラウリッヅ・ブリッゲのことを考へてゐる……」と書いてゐる。

當時、リルケは三十一になつてゐた。これは西洋流の數へ方であるから、丁度、現在の私とは同年のわけである。

一九三五年三月三日

一挿話

一九〇八年の春、伊太利のカプリ島に友人に聘せられて再遊し、その冬獨逸で發した宿痾を暫く療養して居つたリルケは、漸くそれから恢復するや、前年來の仕事を續けるために、五月四たび巴里に出て來たのであつた。先づ、シャンバアニュ・プルミエエル街十七番地にささやかなアトリエを構へた。彼と殆ど前後して、妻のクララも獨逸から巴里にやつて來た。やはり此の都で彫刻の仕事をするためにである。しかし、リルケはその妻にすら一週間に一度くらゐしか會はずに、ひたすら自分の仕事に沒頭した。仕事といふのは前年その第一卷を上梓した「新詩集」の別卷を完成せしめる事であつた。先頃の一時的不和からは既に完全に和解してゐたロダンにさへその間はあまり會ひに行かずにゐたらしく、五月十二日付のロダン宛の手紙を見ると、「……不本意にも長いこと何もせずに居りましたので、私はいま、全く一人きりで、自分の仕事と共に閉ぢこもつてゐなければなりませぬ。これまでの數ヶ月といふもの、世間の人達と

附き合つて居なければならず、そのため仕事もあまり出來ませんでしたので、私のうちにいままでよりもずつとはつきり目立つて來てゐる孤獨への傾向を、貴方は誰よりもよくお分かりになつて下さるでせう。……」又、七月二十日付の手紙には、「……私は自分の家に、核がその果實の中にとぢこもつてゐるやうに、閉ぢこもつてゐます。そして食事にしか外出いたしませぬ。私の妻すら、一週に一度、ちよいと私の樣子を見にくるだけです。私の本は八月末までに仕上げてしまはなければなりません。……」

そのやうな孤獨の裡に「新詩集別卷」は八月末脫稿せられた。その卷頭に「アポロの古拙なるトルソ」なんぞと題せられた詩を載せてゐる此の詩集は、その「大いなる友」オオギュスト・ロダンに捧げられた。

妻のクララもその頃彫刻の仕事を了つて、再び獨逸に歸つて行つた。リルケもその妻に伴つて暫く獨逸の友人等のところへ行かうとしかけてゐたが、「……私はまだ決心がついてゐません。けれど、仕事を仕上げたばかりなので、大ぶ疲れてへとへとになつて居ります。ですから、この秋から冬に、元氣よく、再び仕事に取りかかるためには、氣分を轉換させなければなりま

せぬ。……」（ロダン宛、八月）――そしてとうとう獨逸行を斷念したリルケは、その代りに、その八月の終りの日に、アトリエをヴァレンス街七十七番地に移した。こんどのアトリエは彼には大へん氣に入つたやうに見える。――「今朝から私の住まつてゐるこの素ばらしい建物と部屋とを貴方に是非ともお目にかけたいものです。その三つの戸口は或廢園の上にひらかれて居りますが、其處にはちやうど古代絨氈の中でのやうに、無邪氣な兎が四目垣を跳び越えたりするのが、ときどき見えたりするのです」などと、引越した當日にロダンに書いてゐる。

それから二三日すると、リルケはロダンに若しか空いてゐる卓子が一つあつたらどんなのでも拜借願へないかと無心の手紙を出してゐる。そんな手紙の一節を讀んでゐると、古い家具類のある、靜かな田舍家に住まつてゐられるフランシス・ジャムのやうな幸福な詩人を羨望しながら、みづからは自分自身の家具を何ひとつ持たぬばかりでなく、「ああ私にはこのやうに屋根さへなく、雨は私の眼のなかにも降るのだ」と喞たずにはゐられぬ孤獨なマルテのかはいさうな姿がひとりでに浮んでくるやうである。――しかし現實では、そのロダンへの無心はすぐかなへられる事になつて、リルケは大いに喜んだ。「……貴方の仰やられるその卓子はきつと私の

欲しがつてゐるやうなものに違ひありませぬ。それは大きな肥沃な平野のやうでありませう、そして私の原稿はその上に恰も村々のやうに並べられるでせう。……」そんな感謝の手紙と殆ど行きちがひにロダンから一つの立派な卓子が屆けられた。「……こんな風に、こんなにも迅速に、願望が達せられるなんて、まるでききわけのよい子供たちのために作られたお伽噺のやうでございます。……」とリルケは無邪氣な子供のやうな喜び方をしてゐる。

その秋からリルケはいよいよ數年前から計畫してゐる「マルテの手記」に取りかかつてゐるが、それがそのロダンから借りた卓子の上で書かれたらしい事なんぞを想ひ描くと、やはりいつまでも子供のやうな心をもつた私には何かしきりに心愉しいものがある。

その後、十一月頃の手紙になつてくると、既にその「マルテの手記」の製作の中にすつかり沒頭してゐる、リルケの憑かれたやうな、痛々しいまでの姿が、それも纔かにした垣間見られないやうになつてくるのである。その頃ロダンへ宛てた手紙の中に、

「……私はいままでよりずつと遠くまで自分の仕事のなかに降りて行つてゐます。ときをり海底にでもゐるかのやうに眞つ暗になります。そして私の上方からの、流れの壓力は、非常に强

くなります。さいはひ、かういふ深處には、それ自身の光線をいくらか發する、燐光性の思念(イデエ)があるものなのです。そのやうなものが、私がいまにも勇氣が挫けさうになつてゐるやうな時に、屢ゝ非常に都合よく通過してくれます。そしてその通過は、實に迅速ではありますが、私をして一瞬、甚だ實在性があるのだけれど、殆ど見知られてゐない、美しい事物に自分が取り圍まれてゐることを、見拔かしめてくれます。……」

さうやつて、毎晩、夜ふけまで小さなホテルの片隅で孜々として仕事をしてゐたリルケの部屋から洩れてゐたあかりだつたのだ、その頃同じホテルに住んでゐた、もう一人の詩人が毎晩それとは知らずにそのあかりを見ながら、なんといふ佗びしいランプの光だらうと思つてゐたのは。——後年その回想錄のなかで、もう一人の詩人はそれからずつと後になつてはじめてそれが誰の部屋だつたかを知り、そしてそのやうに孤獨に堪へてゐた詩人が、そんな夜ふけの佗びしいランプの光を通して、だんだんさういふ孤獨の偉大さを解するやうになつてきた自分にどのやうに慰めを與へてくれてゐるだらうといふやうな事を書いてゐる。

「マルテの手記」はその冬巴里のその客舍で一氣に仕上げられたらしい。それが上下二卷に分

たれて、ライプチヒのインゼル書肆から上梓せられたのは、翌一九一〇年の春の事である。

一九三六年四月

トレドの風景

一九一二年秋、リルケは一人漂然と西班牙に旅した。この西班牙への旅――殊にトレド一帶の何か不安を帶びた風物――は、詩人にはいたく氣に入つたやうに見える。彼は其處にもつと長く滯在して當時彼の心を促へてゐた仕事(*Duineser Elegien*)をしたかつたであらうが、この地方の氣候のはげしい變化のために彼の健康はすつかり害せられ、翌年三月には空しく西班牙を立ち去らなければならなかつた。しかしその地方、――殊にトレドは、ドウイノ及びヴェニスと共に、晩年のリルケの胸奥にもつとも深く鳴りひびいた三つの大きな諧調ともなつたのである。

此のトレドがリルケの生涯にはじめて現はれたのは、おそらく一九〇八年の秋ロダンに宛てた永ぎの手紙(丁度「マルテの手記」に筆を下ろさうとしてゐた時分である)で、それもトレドの畫家エル・グレコの鬼氣を帶びた筆を通してであつた。さういふ假初の出會をも遂に空しくしなかつた點など、いかにもリルケらしいと言へるのであるまいか。

ロダン様

一九〇八年十月十六日、巴里ヴァレンヌ街七十七番地

私は展覽會でグレコの「トレド」の前に一時間ばかり過して歸つて參りました。この風景畫は私にはますます驚歎すべきものに思はれます。私はそれを見て來たまま、あなた樣に書かなければなりませぬ。それはかう云ふものでありました。――

雷が裂けて、突然或町の背後に墜ちます。(その町といふのは或丘の中腹にあつて、その本寺(カテドラル)の方へ急速に上り、それからまたもつと上方へとその宮城を目がけてゐるのです。)さうして襤褸をまとつたやうな光線が地上を掘りかへし、搖すぶり、樹々の背後に、まるで眠れない夜のやうな、褪めた綠色に、其處此處に草原を浮かびあがらせてゐます。向うの丘の塊りからは一筋の細い流れか、なんの動搖も示さずに流れてゐて、その夜色を帶びた暗青色で、灌木どもの綠いろをした炎を怯やかしてゐます。驚愕して飛びあがつたやうな町は、かかる苦悶そのもののアトモスフェアを突き破らうとでもするかのやうに必死となつてゐます。

さう云つたやうな夢をもつべきではないのでせうか。

私はこの繪に一種の劇しさでもつて惹きつけられてゐますので、ひよつとしたら間違つてゐるかも知れませぬ。それにお氣がつかれたら、どうぞそれを私に仰やつて下さいませんか。

貴下にすべてを、

貴下の

リルケ

或女友達への手紙

このリルケの手紙は、彼の死後、程なく、「新佛蘭西評論」(ヌウヴエル・ルビユウ・フランセエズ)(一九二七年二月號)に發表せられたものである。この手紙と共に、J・Pと署名のある、リルケの死を悼む文が載せられてゐる。(文中、筆者は詩人が既に危篤の狀態にありながら、醫者の死ではなしに、彼自身の死を死ぬことを欲して、遂に一切の注射を拒絶したといふ挿話を引いて、大いに驚歎してゐる。)この手紙の宛てられた女友達は、誰であるか判明しない。が、若い閨秀畫家らしいことはその手紙の中に見えてゐる。詩人が晩年佛蘭西語で書いた小さな詩集「窓」の挿繪を描いてゐる *Baladine* なぞがちよいと譯者の頭には浮ばないでもない。それから何ともことわつてゐない所から見ると、この手紙もやはり佛蘭西語で書かれたものであらうと思はれる。

手紙の冒頭で詩人の云々してゐる詩は「ドウイノ悲歌」(*Duineser Elegien*)である。それからもう少し先のところで、マルテとあるのは、あの有名な「手記」の主人公マルテ・ラウリッヅ・ブリッ

ゲを指してゐることは言ふまでもない。

＊＊＊

私が肉體を無視してそれを魂の供物にするやうな者でないことは、あなたも御存知でせう。私の魂はそのやうな方法で奉仕されることを好みませぬ。私の精神のあらゆる飛躍は私の血のなかに始まるのです。自然全體のいとも見事な樂しい調和に存するところの眞の精神的愉悦を取りちがへぬやうにと、私が自分の仕事に先立つて、まづ、素直に、純粋に、苛立たず、亢奮することなく、生者として（*en vivant*）一切の準備をするのは、それがためなのです。唯、餘儀なくされてゐた長い中絶のおかげと、それから非常に價値はあるのだが何としても一九一二年の日付をもつてゐる諸感動の上に立ち戻らねばならないので、私は異常な立場に陷つてゐるのです。もう暫くすれば、恐らく私は、一昔前から始つてゐる、これ等の歌が一體どんな風にして高まつて來たのやら、その狀態がまるきり解らなくなるのでせう。若しあなたが他日これ等の仕事の二三をお知りになつたら、私を一層よく理解なさるだらうと思ひます。自分で説明

するのはなかなか難しい。

若し私が自分の良心の上に身を傾けるならば、私はそこに嚴格に命令的な一つの法則をしか見出さないでせう。——即ち、自分の中に閉ぢ籠つて、自分の心の中心から自分に云ひつけられた仕事を一氣に仕上げること。私はそれに服從します。——何故なら、あなたもよく御存知のやうに、もうかうなつた以上は、私はさうすることとしか欲しないからです。そして私は自分の獻身と服從とを爲し遂げぬうちは、自分の意志の方向を變へるべき何等の權利をも持たないからであります。

・・・・・・・・・・・・

私はいま「下仕事」（*Vorarbeiten*）を殆どすつかり了へました。つまり、私は文通の夥しい遲滯からやつと救濟されたのです。——考へても見て下さい、（私は今朝それを數へた許りですが）私は百十五通の手紙を書きました、しかもその一通として四頁以下のものはなく、その大部分はごく細かい字で八頁から十二頁ぐらゐのものまであるのです。（勿論、あなたのところに宛てたものは一切勘定に入れませんでした、これは文字なぞではなく、ペンによる呼吸みた

いなものですからね……）まあ、何といふ手紙でせう！　何が何だか私にはちつとも見當がつかないのに、私から――救ひだの、助言だのを待つてゐる人々が澤山居るのです。人生の最も專横な緊急事の前にこんなにも當惑して立つてゐる私から！　しかも私には彼等が誤りを犯してゐるのがよく解つてはゐますけれど、――それだのに、私は彼等に私の經驗の若干を――私の長びいてゐる孤獨の果實の二三を知らせてやらうとしてゐるのです、（そしてそれが虚榮からだとは私は信じませぬ！）さうして彼女等の家庭の眞ん中にどうにも仕樣のないやうに見棄てられてゐる婦人たちや少女たち、――身邊にもち上つた事柄のためにすつかり怯えてゐる若い新婚者たち、……それから、あてもなく刑務所から出てきて、惡醉したやうな詩を書きながら「文學」の中をうろついてゐる、大半は革命的な、若い勞働者たち、――彼等に何んと言つてやつたものでせう？　どんな風にしたら、彼等の絶望した心を引き立たせ、彼等の歪んだ意志を――事件の行きがかり上、ほんの一時的な假りの性格をとつてゐたところの、が現在は、殆どその使ひ方も知らぬ異樣な力として彼等自身のうちに持ち扱つてゐるところの、その意志を調節してやれるでせう？

マルテの經驗は、屢、私をしてそれ等の未知の友の叫びに答へるべく餘儀なくさせるのです、若しも何びとかの聲が彼のところに屆いたとしたら、彼はそれに應じたに違ひありませぬ、――そして彼は慈悲深い目的を擲つことの出來ぬやうな行爲を私に形見として遺して行つたのであります。――且又、さういふ獻身を續けるやうに私を餘儀なくさせるのも、私の形づくりたいと思つてゐるあらゆる事物を私の愛の力のすべてを以て（それは彼が私にその使用權を遺して行つたところの不可抗力なのです）私が愛するやうに私に要求するのも、彼〔マルテ〕なのです。あんなマルテのやうな男が、ああまで彼には恐ろしかつた巴里で、一人の戀人をか、或は一人の友人をですら、持つてゐたと想像して御覽なさい！　彼は事物の深奥へあれほど遠くまで這入つて行けたでせうか？　何故かと云ひますと、――マルテは屢私たちだけの何回かの會合のなかで私にこんなことを言ひましたが、――君がそれに本質的な生命を與へようと願つてゐる事物は、先づ、君に要求する、……君は自由であるか？　君は君の愛のすべてを自分のために捧げる覺悟が出來てゐるか？　丁度、あの接待者聖ジュリアンが、單なる一時的な慈愛では爲し得ないやうな、そしてその原動力として愛、一切の愛、この世のありとあらゆる愛をも

つてゐるやうな、崇高な抱擁をその者に與へてやりながら、あの癩病患者の傍に臥たやうに、君は自分と一緒に臥る覺悟が出來てゐるか？　そして若し事物が（とマルテが私に言ひますには）――若し事物が、君が君の興味の僅少をもつてすら他の物に氣をとられてゐるのを見拔くが早いか、彼は閉ぢこもつてしまふ。彼は多分君に何か一言ぐらゐは云ひつけるだらう、ほんのちよつと親しげな小さな合圖ぐらゐは君にするだらう、（それだけでも既に、口のうまい謬見の方へ始終引張られがちな人間どもの間に閉ぢこめられてゐる人間にとつては、大したことだけれど）……が、それは、彼の心を君に與へるとか、彼の忍耐づよい存在、彼をすこぶる星座に似させてゐるところのあの天體的なやさしい恒久性を、君に托することは、拒絶するだらう！

一事物が君に語るためには、君は或る一定の時間、それをこの世に存在してゐる唯一の事物として、獨自の外貌として、把握してゐなければならない。――さうしてもつて始めて、それは君の孜々とした排他的な愛によつて宇宙の中心に置かれ、そしてその時こそ、その比類のない場所で天使どもに奉仕されるであらう。私の友よ、あなたが此處に讀むものは、私がマルテ（苦痛と誘惑とに充ちた多くの年月の間の私の唯一の友人）から受けた教訓の一節です。そして

私にはあなたもあなたのデッサンや繪について語りながら、それと全然同じことを言つていらつしやるやうに思へるのです。筆や鉛筆でもつて抱擁し、愛撫し、手ばなさぬやうにする、さういふ愛の絆（ほだし）によつてのみ、それ等のデッサンや繪は價値があるやうに思へる、とあなたは仰言られて居ましたけれど。

・・・・・・・・・・・・・

私がこの前の手紙に使つた「運命」（*Sort*）といふ表現に吃驚なさらないやうに。私が運命と呼ぶのは、不可避的に、精神の整理だの、本來孤獨であるべき高揚だのを中絶せしめ、廢止せしめに來るところの、あらゆる外部の出來事（例へば病氣などをも含めて）を指すのです。セザンヌはそれをよく知つてゐました。彼はその後半生、三十年間といふもの、彼の言葉を使へば「鈎をひつかけに」彼のところにやつて來るすべてのものから遠ざかつてゐました。そして彼の從來の慣習に信賴し、それに何もかも委ねてゐたのです。そして彼は、一日の仕事を失はぬために、彼の母の葬式にさへ行くことを肯んじなかつたのでした。その話を聞いた時、まるで、それは矢のやうに私に突き刺さりました。そしてその燃ゆる矢は、私の心臟を射つつ、そ

れを明識の火事のなかに放棄してしまつたのでした。我々の時代には、かかる不屈不撓、かかるはげしい熱狂を抱いてゐる藝術家は僅かしか居りません。が、私は信じますが、かかるものなくしては、人々はいつも藝術の表面に止つてゐるでせう、それだけでも、勿論あなたに氣持のいい發見を許す位の豐富さはもつてゐませうけれど、それでは賭博者が賭博臺に參與するぐらゐにしか藝術に參與できませぬ。屢「好い目」が出せても、それは絶えず法則の從順にして巧妙な猿でしかない偶然に左右せられてゐるのです。

私は屢、それを讀ませぬために、青年たちからマルテの本を取り上げなければなりませんでした。何故かと云ひますと、生きることの不可能なことを殆ど證明するに了つたかに見えるこの本は、云はば、それに逆ひつつ、讀まれなければならぬからです。若しこの本に苦い叱責が含まれてゐるとすれば、それは決して人生に對して向けられてはゐないのです、――反對に、それは我々が我々に運命づけられてゐる、此の世の無限の豐富を殆ど全部失つてしまふのは、無氣力、放心、因襲的な誤謬によつてに過ぎないと云ふことの、絶えざる證明であるのです。

私の親愛なる者よ、かかる精神をもつてこれ等の頁からはみ出してゐるものをお讀み下さい、――それはあなたの涙を惜しませぬでせう、が、それはあなたの涙に、より明るい、(そして云はば)透明な意義を與へるに足りるものでありませう。

二伸、――私は、土曜日に、ホオリンゲンの館のすばらしい小徑をさまよひながら、あなたのために、こんなストロフを作りました。

すべては空しいとは誰が言つた?
あなたの傷つけた小鳥だつて、
それがもう飛べぬとは、誰が知つてゐる?
さうして私達の愛撫の花はおそらく
私達よりか、それを咲かした土地よりか、生きながらへる。
いつまでも愛の所作(しぞさ)は消えないのではないが、

それがため、あなた達は——胸から膝まで——
すつかり黄金の甲冑で、かためられてしまふ。
さうしてその闘ひがあんまり純粋なので、
天使があなた達の後を引受けてくれる。

リルケ年譜

一八七五年　十二月四日、プラアグに生る。古き貴族の後裔なり。

一八八五年　幼年學校に入學。五年在學の後、退學す。

一八九六年　ミュンヘンに出づ。既に「人生と小曲」(Leben und Lieder, 1894)「家神奉幣」(Larenopfer, 1896)等の詩集を出版せしも未だ世間の視聽を集めるに足らず。それ等の詩風は概ねスラヴ民謡風のものなり、又ハイネを思はしむるもの少からず。この頃丁抹の作家ヤコブセンの作品を知りて私淑す。

一八九七年　引き續きミュンヘンに滞在。伯林に往く。リリエンクロオン、ホフマンスタアル、デエメル等と交る。「冠せられた夢」(Traumgekrönt, 詩集)を著す。

一八九八年　初めて伊太利に遊ぶ。トスカノ、フロオレンス等に多く留る。「基督降誕節」(Advent, 詩集)「人生に沿ひつつ」(Am Leben Hin, 短篇集)を著す。

一八九九年　五月、露西亞への旅――この露西亞滯在は彼の生涯に一轉機を劃せり。

「露西亞こそは私には眞の現實でありました、それと同時に、現實といふものは遠方にあるものであり、そして忍耐づよい者にのみ極めて徐々に近づいてくるものであると云ふ事を、深く、日常的に私に認識させて呉れました。露西亞は孤獨者の國です。其處では各自が各自の世界を所有してゐるやうに見えます。山のやうな暗黑に充ち滿ちて。――各自は、非常に謙遜ぶかく、眞に信仰あるものとして、卑下することを一向怖れませぬ。」（エレン・ケイ宛書翰）

トルストイをヤスナヤ・ポリヤナに訪ふ。又ドストエフスキイを愛讀し、その「貧しき人人」の飜譯などを試む（未定稿）。「二つのプラアグの物語」（Zwei Prager Geschichten, 短篇集）「我が祝に」（Mir zur Feier, 詩集）を著す。（後者は一九〇九年に「舊詩集」（Frühe Gedichte）と增補改題せらる。）

一九〇〇年　北獨逸の一寒村ヴォルプスヴェエデに淹留す。其地に屯せるマッケンゼン、モオデルゾオン、フォグラア等の青年畫家に共鳴したればなり。「愛する神の話その他」（Vom Lieben Gott und Anderes, 短篇集）を著す。

一九〇一年　クララ・ウエストホフと結婚す。クララは嘗てロダンに學びしことある女流彫刻家なり。この頃より漸くロダンに傾倒し始む。

一九〇二年　「家常茶飯」（Das tägliche Leben, 戯曲）「最終の人々」（Die Letzten, 短篇集」を著す。又、「形象詩集」（Das Buch der Bilder, 詩集）成る。

八月末、初めて巴里に往く。獨逸の一書肆の乞によりロダンに關する評傳を書かんがためなり。ロダンを識る。先づトウイエ街に假寓す。當時の狀況は後年の作「マルテの手記」中に髣髴としたり。十月、ラベ・ド・レベ街に移る。

一九〇三年　「オオギュスト・ロダン」（Auguste Rodin）成る。稍〻健康を害し、三月より四月に至るまで伊太利ピサに近きヴィアレジオに靜養す。その後、一度巴里に戻りしも、間もなくヴォルプスヴェエデに赴き、暫くその地及び近傍のオオベルノイランドに滯在後、是度は妻クララと俱に再び伊太利に往き、ヴェニス、フロオレンスを經て、十一月羅馬に至る。是年又「ヴォルプスヴェエデ」（Worpsweede, 畫家評傳）刊行せらる。

一九〇四年　引き續き羅馬に滯在。キエルケゴオル、ヤコブセンを精讀す。「マルテの手記」

の腹案成りしはその滞在中のことなり。ルウ・アンドレアス・サロメに宛てたる手束に彼の將來の仕事のプランを述べたる一節あり。「第一、祈禱書。第二、一エポックを劃すべき嚴格精密なる散文。第三、戯曲試作。第四、詩人ヤコブセン及び畫家スロアガに關する評傳。」――以上四つの中、第一は卽ち「祈禱詩集」(1906)、第二は「マルテの手記」(1910)なるべし。されど他の二つは遂に計畫のみに終れるか。六月、エレン・ケイ等の招聘を受け、アシジ、ピサ、ミラノ、デュセルドルフ等を經て、瑞典に往く。十二月に至るまで瑞典及び丁抹に遊ぶ。

一九〇五年　一月、オオベルノイランドに戻り、それより九月に至るまでヴォルプスヴェエデ、ゲッティンゲン、伯林等に轉々としつつ殆ど無爲に過す。九月、ロダンの招聘により欣然として巴里に赴く。郊外ムウドンのロダン家に寄寓す。爾來、ロダンの秘書役のごときものとなる。

一九〇六年　「時禱詩集」(Das Stunden-Buch)成る。「時禱詩集」は一九〇〇年の露西亞滞在中に萠芽せしものにして、その完成にまで數年を要したり。「修道院生活」、「巡禮」及び「貧困と死」の三卷より成る。神を求めつつ遂に神の應答を得る者の內的獨白のごときものなり。

「おお主よ、我等にみづからの死を與へ給へ。我等が愛し、理解し、苦しみし、其生より由つて來るところの死を我等に許させたまへ。何となれば我等は樹皮と葉とに過ぎずして、只我等がみづからの裡に持てる、大いなる死こそ、すべてのものの凝つて成りし果實なれば。」(貧困と死との書)

三月、伯林、ワイマル等を巡りてロダンに關する講演をなす。旅中、父の死に遇ふ。五月、些細の事よりロダンの怒りを蒙つて、ロダン家を立退くべく餘儀なくせられ、カセット街の小さきホテルに假寓す。その後、一年餘ロダンと交を絶つ。「旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌」(Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph Rilke, 敍事詩)刊行せらる。但し、是は、一八九九年の作に係るものなり。「形象詩集」(1902)を補ふ。八月獨逸に歸る。秋の頃、伯林よりエレン・ケイ宛の書翰に、

「若し私の內部の欲求に從ふとしたら、いま私に一番よいのは巴里に往くことでせう。八月のはじめまで私は其處で眞面目に熱心に仕事して居りました。……重い心で、私はそれほど自分の仕事に適當な巴里を見棄てなければなりませんでした。」

されどその巴里にては生計の途を見出し難かりしため、伊太利カプリ島の友人より聘せらる

るまま、十二月其地に立つ。

一九〇七年　五月に至るまでカプリ島に留る。五月末、漸く意を決して巴里に出で、カセット街の舊居に落着く。詩作に專心す。

十一月、維納等に赴く。ロダンに關する講演のためなり。この頃より再びロダンとの文通始まる。「新詩集」(Neue Gedichte)を著す。「時禱詩集」のスタイルの頗る茫漠として殆ど無形なりしに反し、「新詩集」のスタイルは極めて堅牢にして彫塑的と云ふを得べし。ロダンの影響著し。

「それから私の新しい詩集でありますが、その中には謙讓な氣持で自然に卽して仕事をした數篇のものがございます。いかにあなたの作品と生き方とが私に明白な進歩を促したかを、人々が其處に認めんことを。何故なら、若しも他日自然を立派に追及した人々の間に私も伍せられるやうなことがあるとしましたら、それは私が心からあなたの忠實な弟子であつたからに過ぎませぬ。」(ロダン宛書翰)

又、「オオギュスト・ロダン」(1903)を補ふ。十二月オオベルノイランドに滯在。

一九〇八年　三月、靜養のため、ナポリを巡りて再びカプリ島に遊ぶ。　エリザベス・バレット・ブラウニングの「葡萄牙詩抄」(Sonette nach dem Portugiesischen)を譯す。五月、巴里に出でカムバアエユ・ブルミエエル街に居を構ふ。「新詩集別卷」(Der neuen Gedichte anderer Teil)成る。この頃セザンヌの繪畫を知り、甚しく傾倒す。

八月末、ヴァレンヌ街に居を移す。十一月頃より「マルテの手記」に筆を下す。十二月二十九日付のロダン宛の書翰に、

「詩をつくる場合は、いつも外部の事物のリズムによつて助けられ、すらすら運ばれるやうなことさへあります。何故なら抒情的抑揚は自然——水や風や夜——のそれと同じだからであります。が、散文をリズムづけるには、自分自身の内に潜入して、血のリズムを發見しなければなりませぬ。」

一九〇九年　殆ど巴里を離れず、「マルテの手記」を書き續く。傍ら「鎭魂曲」(Requiem, 詩集)成る。

一九一〇年　「マルテ・ラウリッヅ・ブリッゲの手記」(Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge.)公にせらる。當時ルウ・アンドレアス・サロメに宛てたる書翰に、

「あなたは私がこの本の背後に、恰も生き殘つた者のやうに止つてゐるのがお分かりになりますか？

……私はこの本の終りに近づけば近づくほど、それが何か一つのエポック――分水嶺――のやうなものを作るやうな氣がいたしました。が、今や、あらゆる水が向う側に流れて行つてしまひ、そして私だけが、この希望のない果しなき乾燥の中に取殘されてゐることは、確かな事實であります。……私は私の全財産をこんな物に徒費するやうな莫迦げた事をしてしまひました。が、一方、この物の價値はかかる私の破産からのみ生じたのでありませう。そして私は、長い間マルテが私には敗北とは見えず、寧ろ天の見棄てられた領城への向ふ見ずな上昇として見えてゐた事を、思ひ出します。」

是年も概ね巴里にあり。十一月、アルジェリヤ、テュニス、埃及への旅に出づ。

一九一一年　三月甚しく健康を害して埃及の旅より歸り、ヴェニスにて暫く靜養後、巴里ヴァレンヌ街の舊居に落着く。　夭折せる佛詩人モオリス・ド・ゲランの「サントオル」(Die Kentauer) 及び聖ベテルスブルグ帝立圖書館の古文書中に發見せられたる說教文「マグダレナの戀」(Die Liebe der Magdalena) を譯す。秋より、墺太利アドリア海沿岸の一寒村にありしドウイノ古城に逗留す。その古城はマリイ・フォン・トウルン・ウント・タクジス・ホオフェンロオエ公爵夫人が彼のために提供せるものなり。

「いま、私はこの古い館に、全く一人きりで、住んでゐます。この館は、それがその上に屹立してゐる岩石のやうに、がつしりしてゐて、時間と海――その海の鹽は油斷も隙間もなくその館を蝕まうとしてゐるのです――に對して挑戰してゐます。この館の大きな壁は、私をまるで囚人のやうに閉ぢこめてゐます。が、ときをり私は、常春藤の群でもつてこの古い館を攻擊してゐる、急勾配をした庭園の中に、拔け出すことを許されます。ときどき小春日和のやうな數時間の續くこともありますが、日沒が早くて、四時頃から、もう冬の燈火に向はねばなりません。」(ロダン宛書翰)

かかる古城にて全く孤獨に冬を過す。伊太利の女詩人ガスパラ・スタンパ等を愛讀す。

一九一二年　一月、「ドウイノ悲歌」の第一稿成る。他日、詩人自ら彼女に語りしとトウルン・ウント・タクジス公爵夫人の記せる所に據れば、

「一月の或日、ドウイノで、リルケは非常に面倒な用件の手紙を受取りました。それへ出す返事を考へるため、彼は戸外に出て行きました。それは風の强い日で、太陽は波立つた海を赫かせてゐました。彼は返事の文句を考へながら、海面から二百米もあるやうな絶壁の上をさまよつてゐました。突然、彼は立ち止まりました。風の音のなかに、一つの聲が彼にこんな問を發したやうに思つたからで

す。「たとへ私が叫んだとて、天使の仲間うちでは誰が私を聽いてくれよう？」彼は小さな手帳を出して、そのままそれを書き取りました。次いで數行の詩句が殆ど期せずに書かれました。……その晩、第一悲歌が成りました。第二悲歌も數日のうちに成りました。が、それきりで神の聲は聞えなくなりました。それから十年の長い年月、彼はその神の沈默にむごくも苦しまなければならなかつたのでした。」（「回想のリルケ」）

七八月の頃ヴェニスに遊ぶ。エレオノラ・ドウゼと交る。十月より西班牙に旅す。多くトレド及びロンダに居る。「ドウイノ悲歌」を書き續かんとせしも成らず。

一九一三年　二月遂に西班牙より空しく歸り、六月頃まで巴里に滯在す。「マリアの生涯」（Das Marien-Leben, 詩集）を著す。又、日頃愛讀せる葡萄牙尼僧マリアンナ・アルコフオラドの遺せる五通の戀文「ぽるとがる文」（Portugiesische Briefe）を譯す。

六月シュワルツワルドに往きて保養す。八月より伯林に滯在。十月巴里に歸る。再びカムバニュ・ブルミエエル街に住す。アンドレ・ジイドの「放蕩息子の歸宅」（Die Rückkehr des Verlorenen Sohnes）を譯す。

一九一四年　ミケランジェロの詩を譯す。又、十六世紀中葉のリヨンの閨秀詩人ルイゼ・ラベの遺せる二十四篇のソネット（Die vierundzwanzig Sonette der Louïze Labé）を譯す。

歐洲大戰勃起し、巴里を立退く。

一九一五年　ミュンヘン、維也納等に於いて新聞班の一員として勤務す。

（大戰中、ドウイノの古城は伊太利軍のために無殘にも破壞せられたり。）

一九一九年　戰亂漸く治るや、數年間殆ど全く中絶せられし「ドウイノ悲歌」を書き續くべく、瑞西に赴き、ジュネエヴ、ソリオ、ロオザンヌ、ベルヌ、ロカルノ、ベルグ、エトワ等に轉々として淹留しつつ、空しく三年近き月日を過す。或時はもはや「悲歌」の完成は到底望み難く見え、已むを得ずんば斷片のまま是を公にせんかと欲せし事もありしごとし。ボオル・ヴァレリイの詩にいたく感動し、その飜譯を試みはじめしもその間の事なりき。

一九二一年　七月、ヴァレエ州ロオヌ溪谷のシエルの近くに十三世紀頃の建立にかかはる古塔シャトオ・ド・ミュゾットを偶然發見す。修理を加へて、此に隱棲す。

「此のあたりの風物に不思議に西班牙とプロヴァンスとを想起せしめるものの ある事が特に私を打ち

ました。何故かと申しますと、大戰前の二三年、私に他のもの以上に力强く話しかけてくれましたのはその二つの土地であり、そして今、こんな瑞西の山間の遠い溪谷にその二つの聲の融け合つてゐるのを發見したからであります。」(トウルン・ウント・タクジス公爵夫人宛書翰)

ボオル・ヴァレリイ、伊太利旅行の途次、此シャトオに詩人を訪れしことあり。

「恐ろしい山々の廣漠たる風物の中に全く孤立せる小さな莊。私はこれまでかかる孤獨な存在、かかる沈默との極度の親密を想像だに出來なかつた。親愛なるリルケよ、あなたは純粹なる時間の中に閉ぢ籠つてゐるやうに私に思へた。これ等の同じやうな日々を透して、向ふにはつきりと死を見させて置くやうな、そんな几帳面な生活の透明さを私はあなたのために恐れた。が、あなたを氣づかつた私は、何と愚かであつたか！（ポオル・ヴァレリイ「リルケ頌」）

一九二二年　二月、「ドウイノ悲歌」(Duineser Elegien) 成る。十一日付のトウルン・ウンド・タクジス公爵夫人に宛てたる書翰に、

「遂に、公爵夫人よ、遂に祝福せられた時です。ああ、私があなたに、この悲歌の完結――さう私は思つて居りますが――をお知らせできる、この時は何んと祝福せられてゐることでせう。十篇です。……すべては數日の間に成りました。それは嘗つてドウイノにおいてさうであつたやうに、いふべからざる颶風でした。心の嵐でした。私の裡に緯であり經であつたすべてのものは截ち切られてしまひました。その間何を糧にしてゐたのだが全く思ひもつかない位です。恐らく神樣だけが私の何を食べてゐたかを御存知でせう。……」

傍ら「オルフォイスへのソネット」(Die Sonette an Orpheus) を作る。是は夭折せる一少女のための墓標として書けるものなり。

「ドウイノ悲歌」完成後、健康いたく衰へはじむ。

一九二三年　なほも若干の詩作（其等の詩は死後「後期詩集」(Späte Gedichte, 1934) と題せられて公にせらる。）をなせし他、ヴァレリイの「詩集」(Gedichte) 及び「ユウパリノス」(Eupalinos) を譯す。

一九二四年　ラガアスに靜養す。この頃より佛蘭西語にて卽興詩を試み、晩年に至るまで「果樹園」(Vergers, 1926)「薔薇」(Les Roses, 1927)「窓」(Les Fenêtres, 1927) 及び「手帖」(Carnet de Poche, 1929) の四つの小さき詩集を作る。

一九二五年　巴里に最後の滯在をす。九月、瑞西に歸りしも、健康頓に衰へ、ヴァルモンの

療養所に入る。

一九二六年 十二月二十九日、ヴァルモンの療養所にて壊血病のために死す。ロオヌ河上流の小さき村ラロンに葬らる。その墓碑銘は自ら撰みしものなり。

「薔薇よ、おお、純粋な矛盾、幾重もの瞼の下に、
もう誰れのでもない眠りを味つてゐる悦び。」

雉子日記　畢

巻末記

この「雉子日記」は今から四年前に著した「狐の手套」以後に私の書いた隨筆的作品を集めたものである。こんどは四つに分類して見たが、最初の「雉子日記」は主として一九三七年一月から十一月まで信濃追分に於いて書かれ、次ぎの「山の家にて」は翌年四月から十月にかけて輕井澤の愛宕の奥の山莊に於いて主として書かれた。その山莊には、六月の雨中、片山廣子さんが訪ねて來られて、

風まじり雨ふる林に杉皮の家ぬれてゐたり君が家なるや

フランスの新聞をこまかく裂きて堀辰雄暖爐の火をもす

むすめらしくほそき姿のわかづまは黑き毛いとの上着をきたり

などといふ歌を詠んで下すつたりして、私達にはなかなか思ひ出の深いものとなつた。「讀書の日日」及び「リルケ雜記」は此の數年間に私の讀んだものからの若干の覺書である。後者は私の折々に

譯して來たリルケの手紙などを主としてゐる。かういふものまで私の隨筆集に入れるのはちよつと躊躇もせられた。殊に巻末の「リルケ年譜」は以前「四季」がリルケ特輯號のやうなものを出した時、忽々のうちに作成したものを、その後機會ある毎に加筆したり訂正したりしておいたものであるが、まだ思ひがけない間違などをしてゐることだらうと思ふ。が、それ等のものも今後の私の勉强のためには何かと便宜になりさうなので思ひ切つて附け加へておく事にしたのである。

一九四〇年六月十二日

堀辰雄

雑子日記

昭和十五年七月五日印刷
昭和十五年七月九日發行

定價壹圓六拾錢

著者　堀辰雄

發行者　東京市日本橋區通三丁目一番地　河出孝雄

印刷者　東京市日本橋區通三丁目一番地　河出孝雄

印刷所　東京市京橋區銀座西一丁目七番地　福神製本印刷所

發行所　東京市日本橋區通三丁目一　河出書房　電話日本橋一七四八番　振替東京一〇八〇二番

903
182

903
182

終